

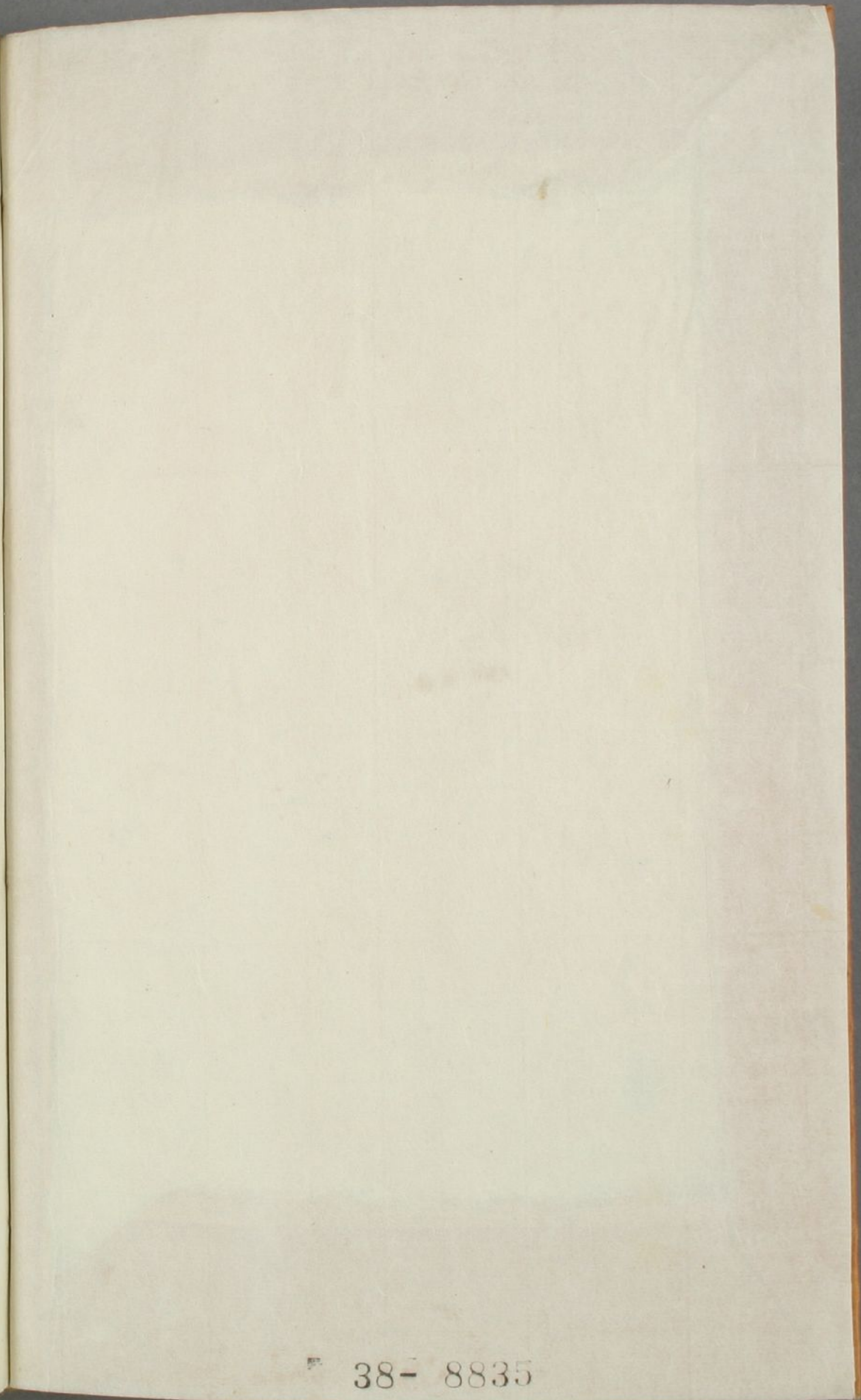
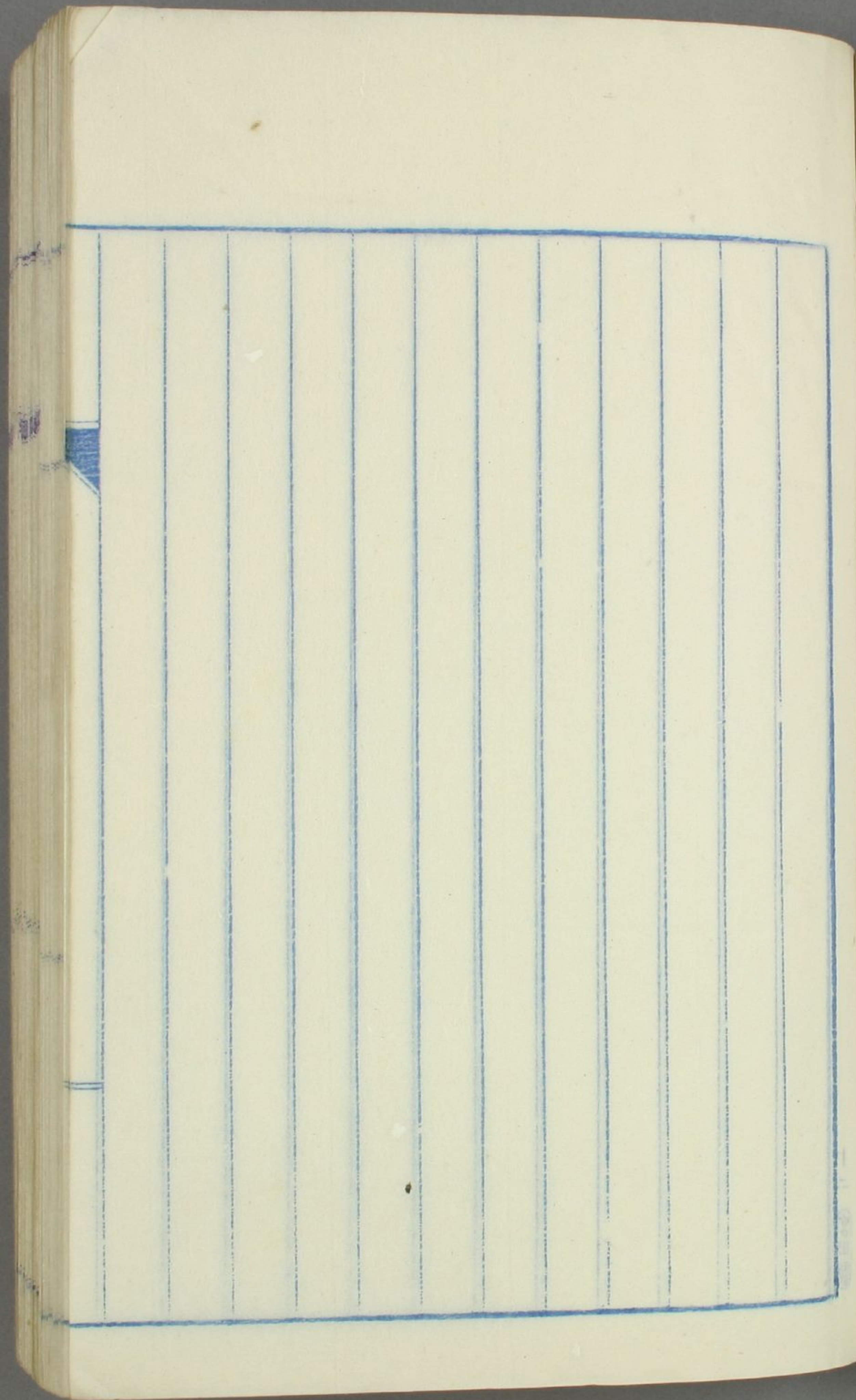
鐵網錄



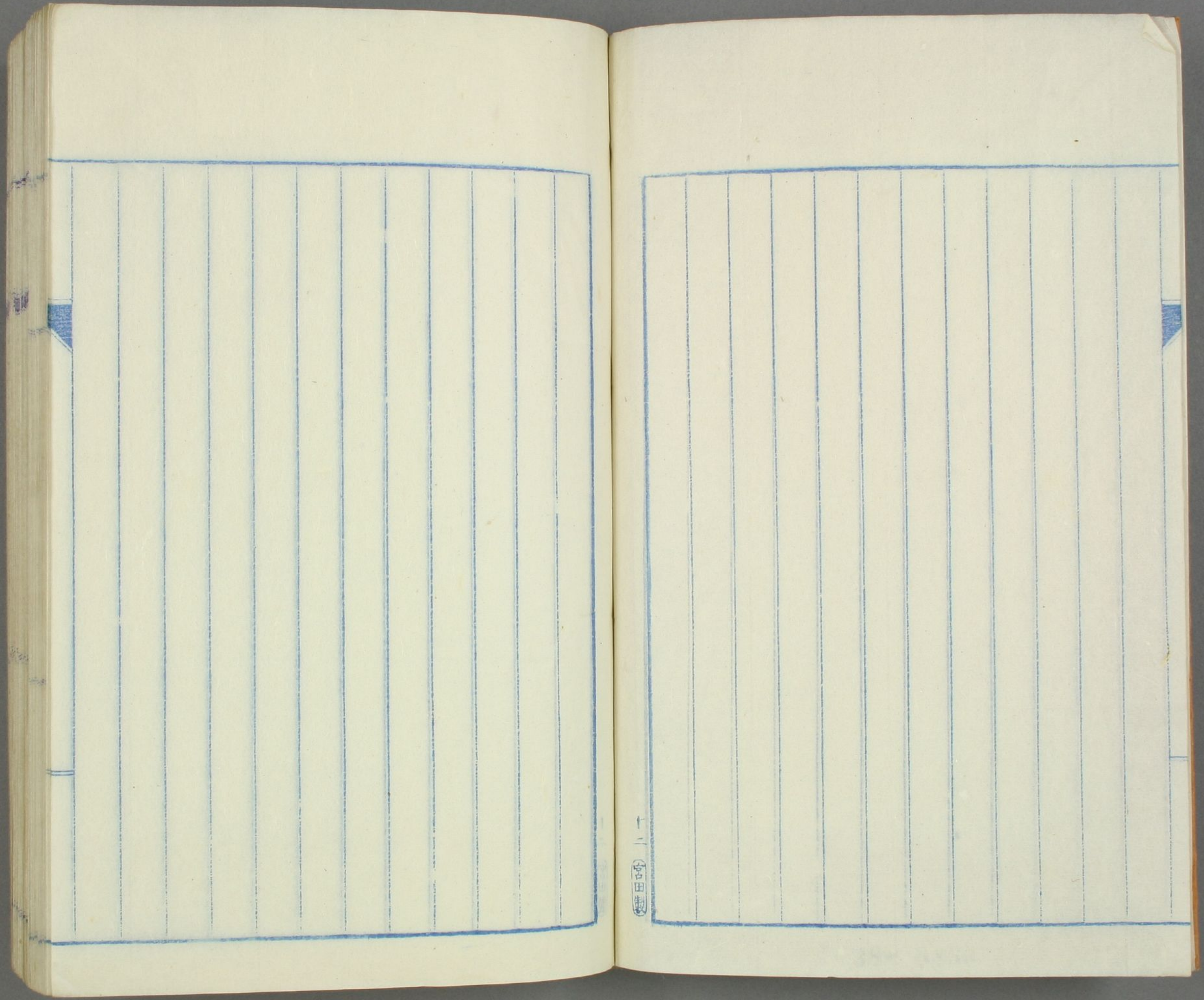
四

特別
14
1919
6

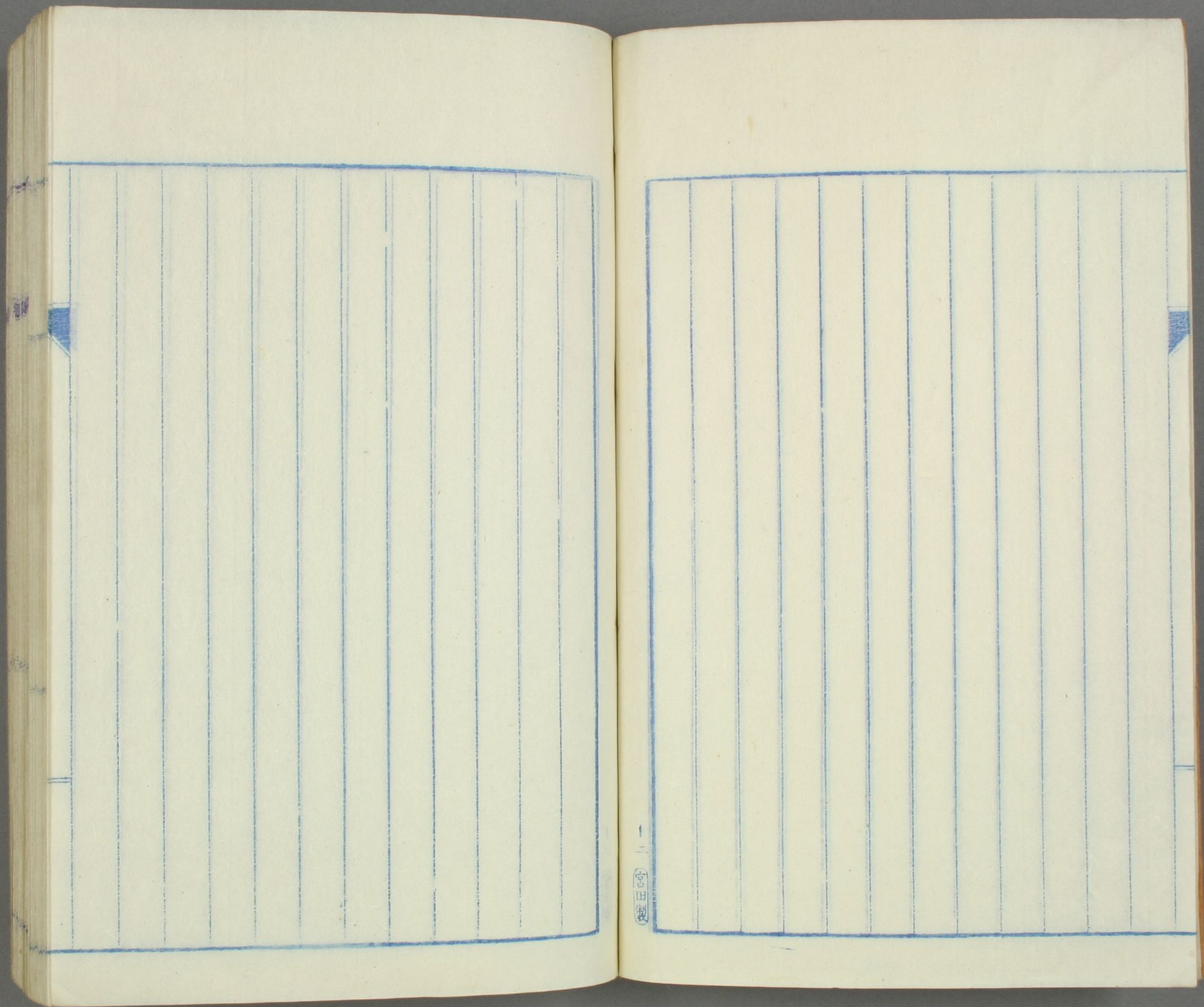




38- 8835



十一
高田



宮田製

マウラは專てんらう

平田篤胤の古今妖怪考に曰く大論佛書に魔羅或言
 惡者、多愛欲、害心、無善根故也。とあり。又俗に男根が
 マウラといふも佛道ぶつだうのいやしめたる名に思ふべし。余
 はもとマウラといふ語の由をみるに、固より古し
 き古言あるを、男根のみならず、陰をも通する名
 あり。是はマウラは真心まごころに、彼を不真情の
 凝結こうけつする、交まじなるゆへゆへにこららなり。

のすりこ木坊主

傳つたへいやしめてすすこ木坊主といふこと佛典ぶつてん

事のふりぬ成實論云、勤行故名精進、至如優
休羅休頭摩等隨水增長、懈怠行者猶如木杵
從初成素日々減盡とあり、これ世諺よりある同し

○注面の士猶用ゆるし

堀左衛門督秀政の臣に極めを注つゝの男あり、平日
両眼より涙を流し眉をいせめ其いままえしきま
い丈んかたき、逆侍の臣あるに申して曰く彼男
の顔色も不老千高も見えももうも、し早く御
暇を給らんかし世上もも笑ひ候と申しけり、秀
政其事を、あやし法事か申使ある、遣りし人

無數のあまう大名のうみう色々の者を扶持す
るものぞとありし、いふ逆侍の者こそつぐみなり
と栲氏注男と曰一筋の侍なり

の信長臨終の實況

室積葉ハの如く附記して信長臨終の模倣
を説けり野史伝説の傳ある所と大いに異なり
このあつかひに、いふ場か

信長不能寺として明智日向寺軍勢本堂、いづと押
ひて、あま古来の義ゆへ根太殿申由其め、信
長の鎧長柄など、あま本堂の天井に懸り居

申後が右の郷方より悉く敵を討ち取らば先を塞げ
らんつて大勢取のけるは仕方のゆとり有之ニ付
四方田^{レホウテン}某と申者脇の口より鍵提きて押込後
ところ若菜丸左の手より刀を提するのり白小袖の髪
を修禪寺の平本結する茶筌髪に結後そのけ
去何者も後やと罵り後を右の四方田鏡より突
伏申後若菜丸の跡より信長白小袖袖のききのみ
りし刀取て御出きて何者も後やと罵り後を
其事凡惟任の謀叛と鬼申後申すつて其供
奥へ御入らば後を今一人の敵追掛つて後を正し

せは事きたるより由言葉と懸る人信長見ゆ
らりみらみり後を右の志矢を放したるす
たの射付けり後を捕らりて奥へ入自
害と見申後其まゝ火の手より後を段後去後
四方田某若菜丸の首取後惟任に見せ後を印目く
るふ成きてとくと見付りしはを見たり若菜丸
りて後と申後馬より悦び属ちらつき申由
後四方田の後より執前へ抱りて丹波の士の由
み後四方田をヨモダと讀みあしく後を言り
レキウテンと讀りて後をレキウテンと

後誤り申す今西崎の事なり

右の一事は永貞傳にあり、戴恩記と、物に
有之、實録と見、申す、本末の鏡のうへに
あり、大勢の一時、夜に、事、又ハ、草太の
修禪寺紙の平本、流る、左指、不可、事、
る、其、物、を、言、記、の、や、の、所、を、知、り、事

○和漢の美人村

村瀬栲亭の秋死日、深し、曰、秋田雄勝郡有野
村、傳為宮人の野、町所出處、其遺跡、生、芍藥、
極艷、余屢經過其地、詢之里人、曰、村中、產、女、自

古必有一妖麗者、然而皆未詳、而殞、是以里閭生
女、患容色之過人也、嗚呼、俚俗之談、固不足論、意
是山川之氣、或使之然乎、按樂史、綠珠傳曰、白州
一派水、自雙角山出、合容州江、呼為綠珠江、亦猶
歸州有照君灘、照君村、照君塲、吳有西施、谷昭
粉塘、蓋取美人出處為名、又有綠珠井、在雙角
山下、耆老傳云、汲此井者、談女必多、美麗、里閭
有識者、以美色無益於國、以巨石填之、再後、虽有
產、女、端、妍、者、而七竅四肢、多不完具、異哉、山水之
使然、昭君村生、女、皆、美、破、其、面、故、白、居易、詩、曰、

不取往者戒、恐貽來者羞、至今村女面、燒灼成
癍痕、又以不完具而惜焉、

○異點同奇

榜亭の私記曰、陟北曰、京北鞍馬山不盡有人點及刀
杖痕、世傳源義經初遇異人、學劍於此、近江有磨
針山、土人云、在昔一僧過此嶺、遇老媪磨斧、
問其故、媪曰、為鉗耳、僧乃感悟精修、卒為馬
傍、按明一統志曰、馬鞍山在滁州全椒縣西北五十
里、山有人點、入石寸許、又有柱杖點、入石二寸、又
磨鐵洞、在涇陽府大鰲山北、真武修煉久之、

未契玄元、亟欲出、至此洞、忽遇老媪操鐵杵磨石
上、問磨此何為、媪曰、為鐵耳、曰、不亦難乎、媪
曰、功至自成、真武大快、即返巖精修、卒得上道、
因名曰磨鐵洞、又方輿勝覽曰、磨鐵溪在象耳
山下、世傳李白讀書山中、未成棄去、過一溪逢老媪
方磨鐵杵、問之曰、欲作鐵、李白感其意、卒業、
媪自言武姓、今溪信有武氏岩、抑何其事之奇、
而一相似之甚、姑錄以備異聞、

○

詞卑——七能々人情を安んず、八川松あり左二三

四を挙ぐ

新換校の紫をのり

隠居所を惠比壽紙など繕是し

請けて見なんば晝飯もくふ

絶景の金へかへべき所なり

女房のくふ氣とあるとあき難

丸山や女のよめぬ文かまふ

耳のやけどの行所なり

賣らん時ハ判も出さしき

母の鬼門もあたる松橋

八十七の怒の出る年

雪の不便無垢の火にし摺ん

くさめしむ色根や釘の孫快空

○感味すべき哉句

雨窓閑話の白く先年江戸に食の頭なる車善七と

穢多頭團左衛門と羊論の書ありし善七後度ふ

年して御成敗ふあふべきをいまは切するんが其家来

七兵衛とかいへる者まゝ依り討首ふあふ必死の

忠義たひあるべしとあるかの節世に

地獄も木陰があるか夏の暮

匹夫下劣の身よその其情をよくりひひて言の物言
まの句のいづれも歌の餘情の因にきまぬの味す
べき俳諧どもあまたあり

早さをあつまひの女をくうるれ行く

「こゝろれて七瀬のうらみくる瀬の

此のうらみをあつまひの女をくうるれ行く

「まの句の中の長笑くも妖あま

此のうらみをあつまひの女をくうるれ行く

猶もこの女をくうるれ行く

あつまひの女をくうるれ行く

く思ひたまへわびけんとおぼしき女をくうるれ行く
事とぬす家を立ち出る此の句をいひ出たし
夫感得し呼び度しなりとさ
遠に西天新川の志を志いなる野の男、孫を失
ひて其翌年の七月すそを云ふは、彼孫の
位牌く空供を供ふと

去年まの句の此の句を

此の句をあつまひの女をくうるれ行く

夏小の子は髪なふらうらみ

（女）の句をくうるれ行く

の白としくらる

○孟中の蛇影

晉書云、樂廣字彦輔、常有親客、久潤不復来、廣
問其故、答云、前在坐蒙賜酒、方飲、忽見孟中有蛇、
意甚甚惡之、既飲而疾、于時河南聽事、壁上有角
虫、漆畫作蛇、廣意孟中蛇即角虫影也、復置酒
於前處、謂客曰、孟中復有所見不、答曰、所見如初、
廣乃造其所以、客然意解、沈疴頓愈、とある、
あいとよく似たる事あり、有馬良及といひ、
世の名醫あり、あるやん、このとき、所入物に汲みお

きつゝし水を夜陰のまを給ひし、其あしのかの水
を御覧にける、あむく小々虫、おほくわええありし
かに、たちまち御えらいたみて、たかくたろし給ひし、
良及丸劑をたてまつり、箱して、其虫のくだんを試
みさせ給へと申さん、げえ其言の如く、赤くちいさ、
き虫、いと多く出で、ろしを、御覧せさせ、けんば
御えらす、たのち金之ぬとぞ、そのたれまつられし
丸劑、まことハ赤き糸をきき、ふん、茶あま、ま、
てたてまつらるけり、とらん、かの孟中の蛇と事
たかいたんぞ、其やまひのおこも、も金たるも、かよ

ひでごあるよる 北道随筆

○東 西ハ平知る

世の仙をいふもの蓬萊といひ佛は天竺といふ蓬萊
いふもの天竺ハ西方より抱朴子ハ齊州より日出の
所まを大平地といひ佛経ハ西方故極楽世界といふ
うゝ樂土をいふ移るいはん古も戦多ハ
惟南北より東西ハもん也 漢高項羽の戦宇文
養高歎との戦ハ東西相距キハハのふ

○安永檢校と大雅堂

大雅堂のりりし時三弦を好めあまうその頃

のめ手より安永檢校といふ替者のちの海へアハ
とト居して日る人々を教ふるをゆきん心をやんま
ある時安永が家よりより斯く殊る近海ト居
しなよりを告げし一曲をのそむ安永その志の然
るるを感してやうそ傍ありし三弦をさぐりと
りていきてゆき、然るるその三弦裏皮破んたり
けんか、いとふくつけ、ねど、あの一期的おひ出る、
皮またき、いまま一曲をと乞ひける、安永心よ
からぬおも、ちして、そこハあるを業より給ふ
と別々、大雅をへて傳をまき、傳といふ、安永の

○
京都諸司代松平伊三守は堂上方を殊の外心易く懇
意に申かけさんしお傳奏衆も平生出合被申し也
凡諸司代の公家衆と心易く事ハ閑坐せん直しく
不思議事あるかハ江戸の首尾直しらす也或時
禁裏より伊勢物後の講釋ありし時例の通伊三
守七器出聴聞せし時公家衆寄合講釋の臨りて
被申ける人誠ニ在原の業平と申せし人はあやう
人る如斯好色にてありけるよしと公家の面々被申
けりハ伊三守承り仰のことと業平いたつらこの

るべき指折ることの外在原を浦山敷思召と見へたり
今時業平杯の如き公家殿原か候ハかく申伊三守
諸司代として京都も器在ハたつ所よりとく急度
刑し可申といはれけることと事いこのくしての
江戸表、相知れ吉宗公感し給ハ三州首尾直取
し其後御老中被仰付たり
○^{堂上}平家人の氣配子ヤハ減
土岐丹後の守諸司代の折也月廿日端午の夜火事を
被出たりけりハ京都の公家衆の作言もや
時ととき端午の晩火事出し

江戸人知んらうや御詔司千葉

と夜書しけり是ハ風早某としく公家の口すまみと
る北風早及ハ先年禁裏の回祿三郎岩倉ノ
皇幸御立退の御供しらう火災の危キ中にして
風早とけあふぶ名のつらきこと

二後ノ風早とすけハたうしそやのたう

と被申けんは清めみの言奉のいはく

清めみとてやけものころず

と被申けるとらう大言入心初根あまうと

其次申あくり 今上

〇北方の膽氣

文恭院及高節北宙の画を終すると少キ、放鷹の
途次清多傳法院ニ文晁と共に北宙を召し席
上畫を命し絵小文晁先づ畫く次キる北宙は
軍の前ニ迫み出し従者愕る色らく事ヲ押す
兼數丈の絹を履へ刷毛をたしちらく藍を引
きさて推へたる鷄を花やより出し其跡ニ朱肉
をつけこれを紙上る放ちらう清ハ無心な絹上を
歩し歩ハ趾痕を印す衆皆不意のあまぬまき
手入汗を握らるる事 北宙一拜一拜しん曰

くこゝは是の三田川の風景なりと北方の気勢
このよう書く四方よ書し

○北方の大書

葛飾北方の名古屋に達磨の大書を畫ききこひ
若名の直説より、今書執筆、寺時左にお目
撃しし人の記文を掲ぐ

在十月五日(文化十四年)五日早朝より北方の大書一
を見物せんとして貴賤老幼是を立する門前町の
人通り柳の並を引くらし中寒き云云此所本堂の
東北の方より集会所の前の庭より席を掲げ松丸

太をもち、ませ極を流し、其中の料紙をいろけ、此紙の下
の紙紙売を志きたり、其紙の大々盪つかりる二
十盪あるんば、壁中十間横中六間あり、おん八合羽
をつくる者、元重町の理相寺よりつぎなる由り、さ
し集会所の軒に添いし杉丸太をたて、是代の如く
して両方の端の丸太の頭より、車を仕かけ、料紙の
上の方の軸をつけたるより、細引の綱をつけて、大書
出来よんば、引きあくるためとあり、其書く所の草
ハ葉菜一把ありたるを、面書とし、蒼麦売一と
いろけしなるを、毛書とす、月代、鬘りたるを

ろう手桶の水を筆につけて、ちろし彩をちろし
まかして衣紋を畫する料紙をすかすどこの仕母か
けの小車をして、上へ引あげ、衣紋の所をちろし、た
のこしちろし、ちんと畫く筆の儀を五ツ計りくつし
たる筆をからけ念をちろし、ちんの重きをた
墨入の桶より持ち運ぶる、墨入の盤より筆をの
せし、ちんとつりたる上はせし、此段廿上の
ちろし、儀をちろし、ちろし念を畫くより、沙汰せし
此筆の節のことちろし、夫れちろし衣の彩色をすする、赤
き畫具を手桶ふみ、柄杓よりちろし所へちろし

椀楸帚の糸をつけて、ちんと画し、又不かしちろし
ちろし、衣の彩色ハ門人等こをちろし、其あまう水ぬ
れ紙のちろし、信の肉體人等、雜中をち
之れをおとく、ちろしをちろし、漸々方をおよひ
去ましけるをちろし、供くし杉丸太の上は仕扱
る小車をして、七万ちろし上へ引あげ、ちろし、ま
かハちろしをちろし、ちろし、ちろし、ちろし、ちろし、
貴賤群集しちろし、ちろし、ちろし、ちろし、ちろし、
ちろし、ちろし、ちろし、ちろし、ちろし、ちろし、ちろし、
直し、大畫をちろし、終日ちろし、見せしむ、畫中

文化十四年丁丑十月廿三日、車部畫狂人北宮戴斗
席上とあるしり

此畫はつらね西掛所にある

○
ある人茶に誦みありといふことを利休の関心し時
こなくけるも、我友の^{てん}貫といふものあり、われを茶
を扱きしとき、時刻を違へたる文おこせたり、刻限
をながへしし行きけるも、内なる潜り戸の前は穴
を穿り上る^{てん}蓋のこを敷き、あつちの土を置き、
り、こゝの心もくさうものうし、入るとする折か

ら地の土くえて穴を掘り、穴の底は土の移りたるが
中へあなせみなど、とりあへず湯をあやして、再び入り
けるを、人との^{てん}盟といふ、此事は、後と期明といふ者、
山科へおつて、かくとてやく我んものかなんどのまの
こころづかひを、もんあはせしむるとして、穴を掘
さへんを、志を立しくするといふのは、さうな穴と
志りつて、後ち入るぬ、叔こそその日の盟といふるな
茶いひなするも、(り)あともあはれ、度主ともな
成せやんか茶の道にあはれといふんき、^雲詳記誌

○錢良臣其名を忘る

錢良臣自諱其名、幼子頗慧、凡經史中有良臣字、
輒改之、一日讀孟子、今之所謂良臣、遂改云、今之所
謂參々古之所謂氏賊也、一時輿傳為笑

○唾頭の狂歌

大名の扶持うくる唾頭、ちう茶をいかせんし、が吞し
み給へばある、い大い梓姪そこわしに

あうくともわがとがのふとおぼすなまよ

茶麿^{ちまろ}も目^めありひきてはもや

たのふとはりし事、すうみぬ 醒睡笑

○子供風の子

わらべは風の子と、いしるしうお、廿^{ふた}云々は、何^{なに}も
か、夫婦^{ふうふ}のあいたの子^こるん^んさう 合上

○笑話三則

醒睡笑^{せいすいせう}祝^{いわ}すくるもいさ物^{もの}といふ部^ぶも、曰^{いは}く元^{もと}三^{さん}をい
ひ膳部^{ぜんぶ}よりあつ^{あつ}の目^め出^でたいいさ、いさくし^{くし}た^ためえす
けりぬ、盃^{さか}あられこなれとめ^めるなみで、十^{じゅう}計^{けい}も
惣領^{そうりやう}ふと唾^{つば}をま^ま、靴^{くつ}の計^{けい}も、鮎^{あゆ}のかし^{かし}ら
と^とりて、手^てかひの犬^{いぬ}をよび、こんはと、のかし^{かし}らぞ、く
くといふ、又^{また}セツ^{せつ}八^{はち}つさる娘^{むすめ}のはあ、行^ゆ母^{はは}のく
のちも、魚^{うま}のほわをもちて、お、いんか、のはは、お

くらくといひし無因也、

又同書に曰く大老の七とく老あり、振るゑり湯清出
ちり、其序へまた老あり、そのも膝をすくちり、
又老来あり、膝をおせとあるも、つらふ出かぬる時、
物まわたりあるをよむおし、るはとせ、てまもいとぬ
事の、おそきや、湯をえわかさぬかとはをぬ、
時半をつかぬて、湯は御座るか、つけが御さ、さい
と申ちりけんば、つと笑ひまするにける。

又曰く中風を病ふ者あり、醫者のもとにゆき脈をみせ
けんば、薬計しそん流し難き病なり、ふど三里に灸
をすくんとしあま、いづれもかきぬて談合はす
と、急ぎ補ふかたり、せそくうつけたるくすの申さ
ぬやうや、富士はゆ及なる大山なり、其ふど三里が間
に灸をせよとはいぬに、病がなるとしても、そもく
もぐさかづくものやと

○
光源院殿京都四条の道場にて陣をとり御坐ありし時夜九つ
の大鼓をおけん七つの時打けり、公方より御使ありて番の
僧をめす、定て折檻し及ひるんとし、ふく冬けんば
抱子御たづねありつるに、せん修ふかく睡り入目覚仰

天仕ての故と、あつのみま申上げんが、室の外御機煙よ
くし

此寺の時のたいはいそのなみ

おきしだいれぞうつとしり

○ 萩生茂郷の病中、松岡玄達成喜年とし、くはし醫師あり
薬を贈る時の包紙

調合進申為薬湯、生姜一片煎茶、平生
食物肝要事、唯許牛三片、大根

と書きし、あつし、初句と結句とを代
ふん、いつんの病何の薬も用ひし、と書き、
と書きたる、麻の信、廬を見く

○ 或る人、火の馬、ひん、向りし、此春の大焼、まことよ
事をあき、義理をかき、恥をかき、三角のやけやう
也と吐す、とたははらう、あたくし、四角のやけま

した二間四方の出窓を四ツ焼まうしをり又一人わ
たぐしハ輪違ひのやけまうしをを系そのハい
といふは是邊の丸焼のきんきらぬうち又丸焼
み成りまうしをを馬山人の玉川砂利の是也

○

視聽さといふ書入細川幽雪の狂歌あまた載せ奉り
是内珍らしく覺ゆるをニツミツたふ抄録しつ
幽雪のなまそ人丸の社歌、詣給ひける折かし人集
長歌をよみ手向長なりしが此座へ詣来り人
歌をよみ手向るるらひよそ傳ふいそよませる
へしと各よみたる歌の書付く直なるを遣
し是に記せん候くとまわとき、幽雪公御記

是有ん我等ハ歌の事ハ得しとぬ者のよし仰
有けんハ彌冬るぶらはちと思ひしきうよよの
明けのささくらののぬ所止事しききうよよ思
茅さるハ夫へ書付てたひ候へと仰けんハ一座の
人の中より視引よせ我等記し候くと云時
はのくと明石の浦のあさきうと

と仰えんしのは各笑を催し田舎者と見之し
おうしき事を申とを嘲弄する者もあらしが
華あらしと見先はと申し、かは朝霧とと
の字の書給くと仰えん
よみしお翁もこの甚のしと
と仰えん直るいそき船へ御帰り有しうん冬

御臨りて見にまありしの幽公の御船の
うし聞しつら七毒面なるいしんとさ
ある時鳥丸家の三浦公御同侍を御出
あつける時に菊五丁掃もつりあつけるの
細川二つちよりと出れけり

と仰あつけんの幽公とありあつす

御所車通つし跡も時もし

と御附おさえけん其御帰りに鳥丸様
君仕の老へいそよ幽公の帰りに候時分敷其
つき夜し候くと仰けりの御出のいしと隠れ
つきこあしける鳥丸様そこいし歌一首と

仰えけん

とんとつらくころりところ幽公かいつのちうか

うたをよむらん

幽公ニ浦松と阿部のを御出りぬしける
幽公を御取はつしあつけんの三浦公様ある

お

流るのへくさあつり

と仰えけんの幽公

川上るぬる石のいし

ある時老公仰けんの幽公を
とき色と雑言をこしらへのまらうへしと
こしらへ置待給いける其夜の御衣は

寄橋摺小木

宇治川の橋の柱のしげけのふすりにきこ通る

まきの葉船

丸木橋を座敷の子を抱き通る後

あやうき上のあやうきをみる

としの句を御作り置るお上の

あまの何をさうふ然るおをこまらせんと思ひける
丸木橋を座敷の子を抱き通る後を御見
出し方りも是んことを能き難き思ふ
思し

あやうき上のあやうきをみる

このよ句を御作り置るお上の句仕候へと仰あ
りけり

一ッ橋渡る坐敷の子をたきこ

と通ハしけりおまを公祇に御肝に銘し
和歌の神さう守ぬる個掬の難き申さし
其後ハ何るも歌のう仰るうしとぞ

あゝ人の字十を御よみ候へと好みけり
日本の肥後の火川の火うちぬひと
いと

又十木を懸あゝ歌

かろくすとらきりしきみかきよまのぬは
榎 栲 桐 榭 柿

しひてまつふのすきゆくはうし
椎 松 杉 柚 桑

○

古書危廢の信廟は屏より川弟相麻呂の御成
若田の人より我方より来る種々物後のついでに家
小児と七の御成りも七将基ハキ心しくいませめ
置けりとさう其れを河へか駈り取りたるは戦傷
をも敵を討ち取りたる越さる其とらんし駒敵方
の立とさうしてたらくハ表二心の不忠七日のさ
さる不忠のさうとさう外の御成りあたらあふし
とせいまうしめたるとさういひさうもさる事さう其
ハカとさう里白あつてんかかり忠らさうがさし

とさひぬ又かたわらよりいひさうも里白ぬりし白を
里士方より用ひたるふよからんとて笑ふとあつむい
集足利了れ公、新田義貞朝臣よりさうけし
武家執事軍、降参の時入笠印の二ツ引き両
の中を里士とぬりし中里としたるをみて何ある
五條のけり高札をたてし二筋の中の白みをぬりあぐ
新田くまげふ笠印あると書きたるよ太記
らあつ今この白石もさるたのくひさうと

○

雷田春耕口嗜小史二巻を著し交友の口嗜を直録
す中ノ新田二を抄録せん
山陽解の味 山陽の嗜故解あることを

證とんと支峯の書牘を載てたり曰く

亡父之事、先母より承りたまへ申上、是三十九歳

古より遊心平居りたり、酒を吞出し、及

事新居、悦み見へり、中考可成、及元来

下戸にて酒を不嗜、及性来、餅を好お也

焼餅、阿仲き、餅を阿部川、智長の餅を好

む、糴、夏餅を好む、先づ如此、邦彦より、及

酒の嗜、及此、大酒に非ス、其趣、云々

星表夫人の嗜、好こつき、一説を載す曰く、秋雨

淋、寒、櫛、陶日を連ぬ、夫人二三子を顧みり、曰く

盡人も茶を喫し、羊羹を叱し、櫛、財を散て、云々

りや門弟子相見、て竊う、云々晒、小夫人曰く、お子

等の酒、魚を於ける、おかしと、其下戸、知らん、云々

るり

調庵居士 居士酒を飲まず、好むて、ウキ秋、ノ鱈

を食し、小門生、並木、其を携へ、云々鱈、ノ鱈、ノ鱈

並木、其、云々喜色、云々居士、問、小、子、何、を、好、む、云々

曰く、竹、筍、を、嗜、む、居士、晒、て、曰く、子、何、を、早、く、食、む、云々

告、げ、云々為、め、云々多、云々サ、の、云々長、云々錢、云々を、云々損、云々り、と、云々病

田、車、湖、も、亦、居士、と、嗜、み、を、同、云々す

○華山、云々画、を、以、つ、云々藩、主、を、諷、云々す

渡、云々華、山、守、云々藩、候、の、側、云々侍、云々り、候、曰く、我、左、右、云々令

に、背、く、云々もの、多、し、云々誅、云々立、く、云々之、云々を、云々責、云々す、云々べし、云々華、山、云々對

し、曰く、是、人、左、右、の、罪、云々を、云々あ、云々ら、云々す、云々臣、云々の、云々教、云々訓、の、云々是、云々と、云々す

さう仍て頓首して罪を謝す。是より退き、競馬の四一
巻を作り以て後二献す。其四なる法を古土佐氏に
取り人皆烏帽子狩衣を着し記す。倭文の
記すもを以てし。才一常人替者と馬を競へんとす
替者人馬皆疲立願て了。四才二替者敗をと
し。四才三替者敗を怒り立願馬を替りて四馬の
四才四替者立願を迎へ眼を廢する。四才五馬丁
酒食を並く立願馬と秣し。四才六替者眼の
馬肥へ再び輪立願を試み遂に勝をゆさる。四
才七差之れを是て大に快す所あり。是に於て仁政を
施し民窮を救ふ一藩之んうめある悦勝すと

○

大なる盃を武藏野といへる。古き名を節用集大
全の酒盃大者曰武藏野也。言、野見不盡之意也。
あり。吉原伊勢物語といふや。女、手押の此望より上
戸ありとて大盃出たさんとも、男わびて武藏野ハ
けふふ出して大酒の妻をまらり我もこま入りと
又浅きもの並木を這ふ深き瀬といひしあり。こま
大盃くさぐさあり。江戸より京都迄五十三の盃いつん
も其處の廣狭賑淋りうして盃の大小深淺を分
ちたる。さうと信ひし。

○

百物語といふ冊子の策彦と経巴との百韻漢和を
載せたる中より

雑奈讀殘書

秋風を心行くはる吹き清之と

照し給ひけりまの懐紙の中へ葉を

沙濕履無聲 といふ句

志のよ夜の雨りちかくたふらふ

としんめけると見えたり

○芋の競進会

江州蒲生郡日野の近邊邑に山中村あり例年八月十日田畑を守る野神といふ社に東山中西山中西村芋を煮しん是の長短を較ぶ是を芋くらべといふ年々競り故に善く培養し作り七八尺及ふ七のあり相傳ふ是し此處より林示中の内膳職

芋を煮しけり故に其遺風の残りてあるなり

是は徳川の世の民間競進を奨励する所なり

○伊豆國江川家の舊屋

文化十四丑年正月蕪山御代官江川太郎左衛門

門屋敷修復に江戶幕府御備書の書

し(節略)

江州蕪山私屋敷家作之儀者私二十七代以

前之先祖保元年中大和四守院郡より移り

つ即相立の家作り其後弘長年中修復

仕考即日蓮より自帯の棟札相贈在家作り

依今に任居此より以曆中御本丸御修し

覆之即私屋敷之儀者徳古より一度七火

災く逢不申珍敷家作ニ在右木之内のまゝ
上旨被仰渡るるに白樺木之内一本奉差上
の云い

○杖をつらせよは助けよの義もあらず

寛永年去利友丹の禁制廢しころしむるに
其宗門断絶せず將軍家夫向後は杖をつら
せよと上旨ありけん人々是は憐愍の意
を御助けのと思へるに宗門ハ殺せ一切コ
ロバस्ताとの事さうしとを「コロビ」とハ改宗
のものをハ特典にして其余たけを助け置くと云

○天下先和尙一休の教

仙甘坐候とやんの花幅に一休禪師の墨跡あり

- 一坊主さうさう魚喰
- 一 地獄へ行て鬼さまけらふ
- 一 大食しにくらせよ
- 一 念佛ハ申さす共おやふ
- 一 佛法ハうそおしくも此歌見よ

臨て拾つる寺の上人

北条野 トシキヤウニお

○平田篤胤の喜貝講夕霧

平田篤胤江にたるとを今を聞き喜貝講といふ

席様の講釋をてゝ頃或の歌道の二席あり
「さて伊勢物語の巻を一筋申しませう」

「月やあゝぬ春や昔の喜なきぬ我力」

「つはえのむらさし」

是は心餘のうあくと詠豆とて母見之主が評をつ
けられたのは識つたのむいないさて思ふにつけてし
洋瑠理おしの文句とて作者がいつのう骨をこ
折して作るもの故に極感心しん物のあけをを
場の幾らもある夫も風流の越、物の哀れを云ふ
ことを辨へんむ少くと又少くもわたりて少くと
ハ面白味といひつゝあふ是も狼とて小獣のこは
ものだともふことい誰のち知りも居るけんども

もと喋附えたる事あはれ格お身にしみくと懼を
あすせしである夫ハ夕霧の文句よ

昔ん槍のゆるさるるはやく〜〜〜とい

何とこのちし伊左衛門久しうとて尋ねるらんか
夕霧は奥の削り賑ひる騒いで居るを聞かして
は此の方と若さんたと見限るも他は心おさしちう
とて氣をもみう〜〜とつ居つゝの獨り言

「アー強うい去年の月見の奥座をここ日隈
さき花を昔の飲吹うしる大騒き大夫とて
んの連環まじいいたぬの面白き強く其の主
ハハはらぬい愛つたはあんなの弟の上あいつ
の心底あのおつゝあ〜ふとは思ひぬくまき」

當のそん澄まらぬ心の中も七整しすまは申うら
の月の影……と唄にさるる處ハトント地業
卒の趣向にござるし
講座の脚づかいと深し

○天下を取りし心持

八代將軍の言は英敏よく下情も通したまはる
君也後隆もある夫尼夏の夕御前も出しうら
將軍言草うけし早湯あみさしと見えたる
さぞ心地よくござるしと申せる其尼もと湯秋を
畚うしうらう波も天下を取りし心持もさうして
いとさふ公大に笑ひて給ひて曰ふ天下を有つ
身ハ何快き事あるへき心のまゝ振る

ハ其力も亡ひ天下を失ふべきさうあつてうら物も
かへ日夜心をこらぬす何ぞ湯あみし終りの目もさ
を忘れしぬき事のあるへきこと

○一樹の陰は宿も他生の縁

世事百法も同じいさしへ白柏子のうらなひものよ一河の
流んを汲み一樹のかげもやとさるも、みま他生の縁と
いさし、説法明眼論も宿一樹下、波一河流一樹
同宿、一日夫妻皆是先世縁縁と見えたる、この
書に廿二聖徳太子の作と云いつれなれど偽書と
いふと辨を待たず源平盛衰記大平記義経
記、保曆間記るとよこの詞見えたるかみよき、説
とおもはる、さて珍書なりといふ書る古文類聚

籠の梅のちろ咲とちちきか中とりこめて
とあり八騎と鉢木をかよえせたる作者のたれ
らき、巧と云ふべし

また長唄のよし原産

凡いけるを放つこと先正天皇の御宇かよ
養先四年糸子の秋諸國を始す放生会
とソリ先正天皇ハ元正天皇をいつのほいよ
からみあやまりし唄ひひのめけんまハとちあん
作者のあかつのひもことらん美志四年
糸子の秋といひらんかゝる唄ひものも七すすの
と非事の原始をいふことのはしかることよ
おもたんち(放生会を行はるゝよし)幸佐

官縁起る養志四年九月とあり(七)を清
元のさのんをくむむの唄をゆく

美良志四年中の秋

といへるハいあるむやん清水の初傳し考りし
後こそ八月十五の満月なることとあり
心づかきこといひはるあつこととありと
くおほえさるゝこととありむあつ人の書
きおけるをあらためんふすまきこととあり
世事ろ海

南畝翁記に近松が酒顔童子枕を葉といへる
淨より木の童子の母の童子を二言して成長
る事この心氣をのませしむるついで人の肉を

食ひしといふ迷障の段ありんすや西行か小春
ありしに阿摩尼王の地獄を落つるさまもまた
ありしや老人のかけもめりんかあるあらくれ
なるものを七のありん見しこと平力の
めりし

吾妻浄土の清玄がさまくの奥にけしを度摩
の火まくべし祈りしにさんどもあるしのある
さんばむらじんとして立ちあがるかの清玄が
こころのうちありんともなるうく申むらうか
けりとかけり今世の下午作者のかきこまぬあ
といえぬおんおそろしとかくべし「悪人といひ
七恋の心」一つありんとかける文まことなるの

情をつくせりとつらべし

○謎の語の地名

地名を謎読ると稱する人悪謔と謂べし太宰春菜
詩に白山を高邱と稱す事高の義を取らむと然ん
と高の字は白の義を白帝城と稱する尤も事
安き御来南郭詩に飯傍を我湖と稱す西土の
信州に我湖あり故に州名に因て擬すとを家二詠
訪候を稱して我湖候とす然るに彼地は龍席山
り尤勝んたる名山に駒岳をも龍席山と稱す
しや義の當るを顧すしと只好し唐めりしや其
し京都下三臺の橋を或は白鶴橋と稱す一先
千年橋と云ふ因とを然るに松橋千年と稱すん

青松栲と呼ても可きししや其坐中御門公のま
せりあるとの家ハ松木殿も移りぬ千載公と
辨すべしと申けんハ一座大いなる濃州
岐阜の諸人長良川を風水と稱す岐阜の林を
流すいよとて風皇鳴于岐山の美取と云ん
湖くも又一段ろ竹生を望洲とし石見の
海を硯海とすも悪詭を健と謂ふまの女
奥州岩手山を祖徒躑躅山と稱す冬河の八橋
を南都杜荒洲と稱す是等ハ故實を援けぬ
猶諺まゝ所あり然れども尤も倣ふべし
祖徒治の驛松遠運皇帝ハ南都に在り
帝宮不改漢樓其ま冬州を崎を移すと

る人因て皇帝と邪する人あり我々湖候より更
る甚しまの又まと謂ふし夜般發注

○

物祖徒茅場町ハ是をトてし頃ハ寶井其角と
隣り合さし由其次其角の句ハ

梅が香や隣りの萩生植物の在衛つ

此句ハ時々祖徒を譲りたりと云ふとも言ひ雅
せと梅根中河の香ありあり梅の好文木
の異名也梅根を以つて儒家ハ准すハ香の一言ハ
美をふくめ萩生物ハ骨を細きてし梅香
陽歳在隣家といふ白樂天の句を詠むん
るるると云ふ此考きんるの如し

〇遍照と小町

平賀燈溪のきしりある小野小町清水寺の諸
しける時の贈答の歌

岩の上の旅寝をすんばいと寒くこけの衣をわん

おかしん
十町

世をそとく世の衣はた、一重かたぬハ疎し

いさふたうゆん
燈照一

を引て遍照を破戒の僧とて謔めり、~~本~~本

長内遠のハ之んを然らばと一加蘭社伝、たの如

く云ひり

(前畧)小野小町とて契りあらしなると思ふ、事ハ前

引たる後撰集の贈答の歌をて知る、ちう小町大和

の石堂上寺の訪へやどりたる夜此寺の遍照ありと
聞て物いひ心みんとし、いひやとていふ、以前契りし
たる中、あるを今天皇の御思ひ、出家ハし、たうとも
我今かくて来ぬるを先やうばいあて昔を忘んはん
あいあやうなみくり言をす、やらむと試みてら言や
りたる、まごさう歌のきも石上の地をといはぬうへ
といひり、樹下石上の僧徒の住むべき所、われ偶
まて旅ねをすんば寒く堪へかたきを、今君人
さま替たる世の衣の身、まごさうも次前の契を
忘んたま、ハおの来りしうさを、も共の語りて慰
めたまんといひ、まごさうを三回句ふりめ、う、あねか、
まごといひり、まごさう、う、ち、く、の、心、し、ら、い、と、聞、也、

といふく秘巻しとおきけを扱ふと甘んん
事多し行平中納言須磨の浦多瑞所持
まさん御覧さまんしおと秘巻するん何をも
しつら松風のつらふむすむし世帯さうとさむ大幅
さう里纏子長廿九尺むうこもあまうしんう
しつら松風村の結ひしむふぶの帯心七
とちりことあまむせしうもせよことのおお
たうしく見あさう(中)折目のこえぬん不書
と念を入穿撃しこ見ん松風くわつ風ま
いも江戸の関お撰松風浪平ううんご
らううー此人の見えそあるいハるんううう
湯煮のあう雨といつるかこ片の茶入の代む

所中せうんて及中の一念多しとこきたるや

○並河天氏

並河天氏の伊藤仁右の門人をも志氣あま草書も
師説を疑ひ自う一家をみるる又回文を
よくしと一例をゆくは伊勢物語の若川の段を
評して比喩の魁神代巻の文法をうつせるさう
しとさうり又徹書記が都持衣を題してよめる
開くさよも麻ふはあう都人うつやいさる衣

天氏之のを難けし持衣の清さあま都と云入る
題をたしうなせんといふ麻ふあうし後う錦

かと心をつけんハ、いと卑しき心は、さうとさうり
又或の人「高き志」を題せん

牛さか引きも入んかとあけてはる

我ら門すぐる牛車やなん

と詠める源が物語る中川の節りる方違ひの
條を今もみちる詠み得てめとの心ありしを天氏
また評して云くかくて人の何事の花老好むさの
こが宴の家のさまさう恋の歌のいこも人目
と惜る情あらむこそと云ノリとや

○常歳の稱

此頃の書生の言あるも、漢く人々を祝して常歳を唱
ふんといふ本末、若歳の天を祝するの法、夜航

詠詠といく○常歳の稱、肉のまゝ起る、古時昔も
の際上下通し、之を稱す、猶自ら朕と稱し、
卑之人を共る、さういふ、漢く以來始め専ら
至尊の祝とす、人臣常歳を稱するを得ず、王候
以下、皆千歳と稱し、庶人、百二十歳と稱す、後漢
書、韓校傳、私帝長生、幸す、大將軍、室、宣、意、
まゝ、今、時、感、極、天下、下、下、下、尚書以下之
れを拜し、伏し、常歳を稱せんと、議す、校、色、を、
して、其の禮、あることと、論して、止む、明末
逆政、瑞、魏、忠、臣、推、朝、正、を、使、く、諛、者、九、千、九、百
歳、と、稱、す、女、見、く、し、室、魏、の、執、り、と、
ほ、犯、す、と、得、る、也

つやと巻しうの志をこそ海等の由の者を知らざるよ
ふ大坂御陣の時の余も壮年よと父の従ひ陣勤の
進み履の城方の様を見しふ先刻見たる志法師
こそ海内誰ん中たるる無き直ちの幸村さんと
云いんしるを近習等大に打撃させさるんか
跡追みけ討取申さんといひけるに討はるるん
其時りしるん武士の情とん此等の事とん
其まし帰るんげるとるん (海内五及在るん)

〇三 義経

我切き頃京都より伊勢尾老遠あたるの十段らの
言ふさるる源九郎義経の登依く色黒く向達及り
て猿眼と誤いしるる是を頼朝卿の舎弟の義

経と思へる大なる誤るるそへ近江源氏の山本九
郎義経の事とる清和源氏と近江源氏と紛ひ
有人同めると九郎義経とんか紛いしるる山本義経の
後又在兵衛尉に任るるし故に及遠の兵衛と
異名たり判官義経の兵衛とんあとも揆非遣使
判及り伊藤守を拜し左衛門少尉の事とる
この頃又波多野尉者義経といふ者あり三人同
時同名ありしを一條良経公想関とるし
入三人の義経とんを改めし中判官義経の義
行と改めし事記さるみちその以前に周防四人
宗四より並末といふ者摂政殿の仕人し頃判
官義経を候しとるし時並末ハ配膳の役

てよく見しやうもまた一向の十冠あるて木曾お
と、いさまかたりて最優の京らんし年路に二十
ふかりる色白く面長うて髪短くきく折々ハ上の
方を見あぐる癖あり只好色うて美女を慕ふせ
るよりの並末記し置けりとらん判その書ハい
また見ずと信廬後編に見ゆ

○

貴人車事を知らず昔諸女院ある時おほきま
こ物をあげたる事ありし神覚い始めらんハ何
とも神しりさうて左衣ハ神たがぬあんなも同く
存せしと申さるる下封と聞くと仰あはる
おはしたに衣のあぬを尋ねらるる事ゆくの
十二

おうしかりん花を存りたる者うと申せぬ女院
の仰あはるわんはこを推しおたおしのみく
かきこあううすと又細川幽二お公の姉御前
宮河殿とかわいしつと建仁寺の内如是院とい
ふおはせし事ありき、長尾御牛守殿より
大津こそ来をる石まいつらする由の文を見たま
ひて其の事いふ

神あしんのわんはもたぬよのたじの
るのいしをばいふていくんか
とありしをけんに理りかと即車りて送
たすいしと(醒睡笑)

○

てハなきの何うも人侍不似合の注えうあつ
り引文かぢしと思案を運しよく仰せ侍
くく義きくへ猶よく職方考くも剛紅乳
しきくへ碇しきく直段を取扱め更し
け返りしに及んくと福く断りし区し
め玲ハ手代せと誤えし役侍めりもまふ
管と職方の考くも問合せしやと申す
ひり讀くふらふ由を言へ徳のう破活さ
扱仕向くくしを絶ふけの第一夫も得心と
ハ言葉と巧み言返し第二四人の事性任所考
をも取調く其うも鬼の角も取計ハんま
しめしなせし置し所西馬果し衣の付入更

強し積りか出来たるやと尋ぬ手代の男頭を依け
る面影と主人より申上たるハホシの丸積り
まく御ぬみの越を以つて夫く積り合ひし
十全に福の相懸り申すべく其お直あるを
急度念を人の相任立しすしと云ひんけ
一飾りも及んす然るも其直りも苦し
不達な取扱りにんよと懐中より金も取
手附しと申すを返し其まし三備えん
手代引ぬめの外も申す大切なる御武具
由も念の上も念をぬれ何に置まき
あつて外におれいの御もあつて明日
いづく就く人懐りまう御宿所を

侍懐中より身が宿所は是れと之刺を置て去りて
行きぬめ玲の手代其翌日右所書の通りか石川三郎
坂の到り彼が居宅を此類なる壁破れ柱傾き松ぬし
負困つ体と云ふ且つ驚き且つ疑ひるころ安内を
申入れ主人と面会せしむ輒ち前日の侍は紛らふ
九八先づ指への模範を逐一相談せしむ未だ何共申
上並なる次第と云ふ玲事歎後いふ甚不手
廻りし品物の仕入方より少く差支へますよ今少
し金を前借仁か夫故然る程矣と云ふと手代
此侍公全く夫程の金額を後日遣らば拵ふべき力
ありや否やを推測の爲め言ひ入らる詞を心易く
承知し今年許す二十百有るも知らぬ是れ丈

を渡し申すん所は約り三十百入金の心当りある
後手次第あり特先すべしと包のまゝ出しける
に手代は是れを信んり五歸りぬ玲も其を解し
近隣を問知しける所至つて多き人相違はせん
か不正の所業は是れを問ひたる越き又屋敷の体
割るべきの儀はお作り斯くも其目も打過き翌三
日のころしよむ徳信子ぬる入まうぬぬぬぬ
なるやとのるぬ玲罷り出せ且三の下鉄其外
道且つまゝ見せけん此のお満きの儀を
約束の金を三十百おあせしむ差出しらる
ぬ玲言ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
立てゝる所ぬ武家と云ふ一人もさぬ世の中さる

莫大の御入費を扱ひ新組のお姫をいれ御ほえ
下せるあらず生の御心扱懐りさういふ心仕つて
御守る私しも藤合の事ゆゑあつた心扱の心ざ
に面にお姫の通くる仕立上げ此上の御入刃にお
おけ申し一進せませうと云ふを皆まがゆも
終らす忽ち面毛を奪く武士の事いふ今の一言
奇怪な案は只頼み下り定めし屋敷の
抱子我等が身のようわり右抱の大金を調巻
し得るき人休まぬおと見下しその事さ
へし身共さるあつたあのと若年の時さう何
武具を調へんとお心扱つてさういふの飛長と者
き漸く是くまゐる其入用を貯へ事將たる成

人といふものさういふ大切さる武具ハ昔も頁
けあつたとハ不考の事なり此言をゆく上へ金銭も
何の用なりとせん善て其許へ送るべきさる内
金も悉皆打捨つべし仕立の義ハを調へると
言放り既の言を起せんといふまめ於大さるれ
今今く私の申さる残金引お引つて差上
せんと斯おる上へさる所をワに差おと控
詞を又申さる谷のこりや何んとす引くとさ
武士の事一一度さういふ二はまも引くの
買けるのと此の外の林に詞最金何扱あつて
も申入の事一己の書外者めつとめ於を虎
目に扱ひ品さるさうもさる氣の武士あ

をも見ずんまきりけりぬ於父子のハニヤセ更ら
きりたれども心配し廿八日葉おけすと
日々三つ坊の存も入通ひ歩く手をおろし詠
へしうい翌卯年の二月まひんまはれ事済
るるりし先前も知んてあんとまをんあん
書洩らしめ或人の日記中に見え

○極楽地獄の書き匠

寺院にある所の極楽の絵の諸菩薩も比留庵
ぬき入南天竺の熱田のさまをんがさもある
いづれん地獄の絵も閻魔鬼王をぬの十王冥
官獄卒まは皆唐の姿をし罪人の悉く日本國の
慶長元和以後の月代刺る姿にしつる人作

者の愚さるる書畫の林きのあやうさる愚昧
のわささるるさるるさるるさるる物なる
出来たるも閻王をほしぬ十王も冥官獄
卒るいづれも悉くから人の如くして一人言
千の勇士所々にあこりし勢のつゝ扇城を打お
と一或いは殺し或は生捕し忽ち地獄破却も
ひしさままをつくりし英雄の勇士の悉く皇
朝人として外戎の張良樊噲虞羽張飛などの
たぐひをいふ(おが)地獄極楽をぬの思ひよ
てつくりし人もさるるの作者をまさ
りあつける正法念經に閻羅獄卒非違有
情は衆生ニ等業一力故見之とあるの海を

（傳いし）

○頼朝（平朝の文也）重耳の似たり

頼朝ハ平の文公重耳の似たり事多し頼朝
諸君二十餘年して天下を覇たり重耳諸國
間関すこと十九年して諸侯の盟を主り重耳
ハ姻親秦穆公の助を得頼朝も時政公力を得
たり頼朝杉山の敗七流ありて痛了重耳の秋
を奔り七臣従ふ天子を尊りて天下を正せしりも
重耳の後世々諸侯を主り王室を蔑視す平之
ふる至りて周も亦振いし頼朝覇府を山東に
基しりて後王室終る微き（後述）

○

⑨

矢野龍溪の忠告録に曰く安祿山の乱起り馬山鬼
をも注おをきし時ハ玄宗に七十一歳貴妃も
六三十六七歳を過り美し正しく作り貴妃にお心
附し七十以上の志矢子を畫き出さふ或ハ人を
さへ又曰く或世或ハ玄宗貴妃の間柄に書る
貴妃もあつたりし如くきし扶思へとも左の
りありし如く所謂病深き時と云ふ
を里方へ進還せしことありあまのり貴妃の
進退せんしん天寶五載七月と九載二月との二
次も一た心り以奴婢作告一た心りまら一以
六朝吹山王禁玉笛作告とあり

○

續阿摩羅集あまの国く之祖伊弉諾村長十印狂て長持の
中忍忍心あるを知らし槍をもつく仕打あつて長十印袴
の股まきし思入りししツカくし行きまんの若もま
去おをつましは坂田あつて其的ま持おの
も持の突お心の難し千とくませしんよとて
いけんかち十印其お女しし即ち袴の股まきを
あつくししも持のそむつづくし行き又踏ん
戻り袴もあつしそろくしとせししも持
の傍へし少可をたれ由の思ひあつてお子をあつて
下袴も突れん長十印手を抱えサテくおつて人の
りぢくしおをめつて

○

或人猫を三えし其能くせんことを欲し辨せんと名
つく人あり為めなま井共のう半名能くしと
依りて名を義経と改む又人あり同じ義経と
鞍馬山にて云物に剣法をそぶるうく天物と
えくへし又如此段を更る人ちて同じ天物と
是も風を飛ぶしと能くおを依りて名と改む風
を拒くしは名に障ありを以て名を依りて名障あり
と改む戸障ありを嵐之を名する嵐を改むと
物もあつてしこしは槍をるも猫と名くと
併し名大いし味くし

○

其碩云男女の志あつてさつてさつてさつてさつてさつて

男女相愛の情と愛の間に愛情と人其の熱がなれば
 こそなるお見(ま)まこととさういふのも男女の間にあつ

○

七「たび甘」
九難きこと如きものあるも親友の問うる事とてしるべき事
是が此意を深く採文せる人等の極意をも悟り
ゆへき歎

○
風集久秋中の竹の竹

去来つぎし首のみりる初日の出(えり)

又其辭世み

乾坤の手をちめたるわうふ

○

サツカレ「ズイ、ニエウコムス」をさす客あり「あふ入
り甘涕淚紛れたるを見せ怪て問て曰く子至親を
喪つての何人む其の歎色あつやとサツカレ「對て曰
く余方ヤよ佐官ニエウコムを殺せ」と決罷て法
然なりデッケンスの紙より蓋もや奪ふ其言より所の
人物を次つて我と年等を相よの際或は泣き或
ハ笑ひ白く林あせやることあり是れ皆互文の真つた
ことなり

○

之れを帯問う聞く曰く人見し我も問ひし如何も不可
言しと云ふを以てせん空しく垂たる事ありふん

学んた扱」と云ひて打棄しなる体も未す可し而し
其人「斯の如くて不可るん世」と云ひて其の初めし
力を入んし之れを替筆し「聖筆并取七め」と
云ひて之れを函筋すし此の如くて我亦其の
行任を交ふるものとす

某老高曰く高法の秘訣ハ大空物を多し客を以ハ
小空物も多し客を鄭重するものあり僅かの
空物を多しするハ其の中程のひけり所あり
此の之れを治るゆへに取らざる一念を多しと怒
恨と云ふ。此の心を鄭重するん故に甘ん
胸中を多しする愉快の念ハ一層深く且つた
り此故に其結果の高上の信用の厚なること大

と云ふ此等の後なる多量の経路を
其人も以つて其言を産す可なり

○

坂本龍馬の手記云々と傳ふ一書あり其真贋
ハ云々云々云々と處世の法教々々を勸せたり

○ 敬言扱意云々

感表を偽り人と云ふ決して扱柄あり法せず
荒し臆する心の生ずる時其人の圍方ありし
婦女の事云々云々を思ひ出せ決して恐る
る事云々云々

後所云々入るゆへ成るゆへ的役所の奥ま
扱目云々復云々云々が肝要云々此奥云々何

ハルク... 生...

ハルク... Majesty (陛下) ... 部の裝飾が Majesty ... 試みる外部を降...

昔若英國公使の西班牙王... 守て居て...

昔英王の卿... 一公使へ... 教さる... 有る公使を...

京傳雪解の白歌

山々の一度... 雪どけに

そこは水白く... 八下踏く

三馬の子まの歌

ふらくもよ... 邪魔のし...

うけ板七月のくまふまにふたひの
所記の句

長持の春うぐいし行衣のく

大晦のまのまの世のまのま

○天正時代の流石

昔皇臣の先治世の流石金借り人なる金指たる者
難治せしん金借るをといふ七の出来て多く借るをせ
うん奸邪の正あるをんを刑罰ありしもの御軍
家語の見えたるを人のや伊勢の外宮の御師
北條の家の天正年中の借る流石あり其文而
然し北金子相済不申の我等人を有と問ふ
つとあり又守臣お日記も近き頃御役家

勤めし者あかし福もあはしく其の子孫もも
ありしものまのまの福も正則より金子を借りし
たる流石を所指せしか右流石を金子を借りし
幾千の流石を三々を現る見たる人の流石
々々其文言の我等無極義の金子借りし
何日流石急な流石可成る然し速にいたし
済不済の流石の流石の流石とありし由昔の
人の恥をあらしもの斯の流石の金子借りし
金借りし人よ此二つの流石をいふ日流石
也あ

○奇才奇句

歐陽修の龍著の句く冠業公中書るを同列の

曰く水底日為天上日と末に對ありて而して保々
楊大年来く此事を白す、會小四つて其對を清
小六年終りて亦して白く眼中人是面前人と一坐
稱しての對とす

○李女貴妃の事

歸田記に云く木下名沈秀亭下、乃是せしん應
制清平詞三首を作し、優劣を兼て
一夕林下中、存貴妃と宴樂す、及むに
妃衣褪し、微乳を露る、以手を以て之を扞
し、曰く「軟柔新剥鷄頭肉」祿山傳に存
て「接對」云、「滑膩如凝塞上酥」帝之の傳
て曰く「信是胡兒只識酥」と怒りて及て

以て笑を為し、謔度如此し、天下安くを得ん、
六人

○
文廟其儀、唐寺燕、一日寒甚、文廟出一對云、天
寒地凍、冰無一點不成冰、廣孝即應、曰、國
亂民愁、王不出頭、誰作主、文廟大喜、漸有興
師南伐之圖、(群譚採餘)

○
陳祭酒詢字汝同松江人、善飲酒、公酣耳熱胸中
有不平事、每對客、發之、人有過、面詰之、不
在翰林、嘗忤權貴、出六安州、同寮餞之、或倡
為酒令、各用二字、分令以韻相協、以詩書一句終

之陳學士猶云、轟字三个車、余斗字作斜、車車
車遠上寒山不廷斜、高字士穀云、岳字三个口、
水酉字成酒、口口口勸君更盡一盃酒、陳云有
字三人直、里之字成然、直直直馬往而不馳

宋世祖與羣臣至殷貴妃墓、誥劉德願曰卿等
笑貴妃荒悲、當加厚賞、劉應聲號慟涕泗交
橫、上以為豫州刺史、帝又令羊老笑、羊亦嗚咽甚
哀、他日有問羊者、卿那得有副急淚、羊曰我適日
自笑亡妾耳

○雜謎

賞字 生員與和商、角口、和商不成和商、生員不成生

頁

頁字 唐虞有克舜無、商周有、湯武無、古文有、今文

無

用字 一月復一月、西月共半處、上有可耕之田、下有長

流之川、六口共一室、西口不圍圍

月字 肩上有、背上有、胸上有、腿上有、脚上都有、頭上無

面上無、耳上目上無、手上指上俱無

○物謎

魚 行也是行、之也是行、坐也是行、卧也是行

鶴 行也是之、之也是之、坐也是坐、卧也是之

蛙 行也是坐、之也是坐、坐也是坐、卧也是坐

蛇行也是卧、立也是卧、坐也是卧、卧也是卧

○潔癖

遂安令劉澄有潔癖、在縣掃拂郭邑、路無橫草、水窮蟲穢、百姓不堪、劉澄

王思微好潔、左右提衣、必用白紙裹手指、宅中有犬、汗屋棟、思微令門生洗之、意猶未已、更令剗、復言未足、遂令易柱、杜瑛

周仁熟燕米芾交契、一日芾言得一研、非世間物、殆天地祕藏、待我識之、答曰、公雖名博識、所得之物、真贗各半、時善誇耳、芾喜、癸笥檢取、肉亦隨起、索中澀手者再、若欲致視狀、芾喜出研、肉粘嘗實不已、且云誠為尤物、未知芾呈如何、余取水、未至、

函以唾點、磨墨、芾变色曰、一何先恭後倨、研污矣、不可用、周遂取埽、唾點磨墨

倪雲林名瓚、字元鎮、性好潔、庭前有栢桐樹、且夕汲水揩洗、竟至槁死、嘗留友人宿齋中、憲有污損、夜三四起、潛聽、為微聞嗽聲、大惡之、凌晨令童索啖、痕不得、意懼、拾取葉上有積垢、似啖痕、以寒責、倪掩鼻閉目、令持彙三里外、倪雲林

倪元鎮於七色巾所當意、一日眷金陵趙歌、留宿別業、心疑不潔、俛之浴、既登榻、以手自項、至踵、且扞且嗅、扞至陰、復俛浴、凡再四、東方既白、不復作巫山之夢、且扞且嗅

○好睡

華亭丞謁鄉紳見其未去座上鼾睡頃之主人至見
客睡不忍驚對坐亦睡俄而丞醒見主人熟睡
則又睡主人醒見客亦睡則又睡及丞再醒客
矣主人竟未覺丞潛去主人醒不見客亦入戶張東
海作睡丞記

○王略帖

米元章在真州嘗謁蔡攸於舟中攸出右軍王略帖
示之元章驚歎求以他畫相易攸有難色元章
曰若不見從某即投此江死矣因大呼援船舷欲墮
攸遂進之

○敬妻

康其諱昌緒與妻會必有禮容先令女僕通語再三然
後秉燭造室至於高談論茶葉而退或欲就宿
必請曰某以繼嗣事重輒欲卜其嘉會候報可方
入

○百忌曆

李戴仁娶閻氏年甚少与之共室私約有與則見
一夕闔忽叩戶戴仁取百忌曆看之大驚曰今夜河
魁在房不可行事謝刺而已閻慙去

○煬帝

隋煬帝沉迷女色大夫何稠進御童女車制度絕小
祇容一人有機處其中以機礙女手足纖直毛不能
動帝試以處女極喜召何稠謂曰卿之巧思神妙

此此以千金賜之。稍又近轉閤車，車周挽之，可以昇
樓閣，如行平地。車中御女，則自搖動。帝曰：此車何
名也？補曰：臣任其造，成未有名也。帝曰：卿任其巧，以
成車，朕任其意，以自樂，可名任其意車也。帝又令
畫工繪畫，會合之圖，數十幅，懸於閤中。其年上言
時自江外得替，回鑄烏銅屏數十面，其高五尺，濶
三尺，磨以成鑑，為屏可環於夜所，請獻。投進，帝
以屏迷，而御女於中，纖毫皆入鑑。帝大喜，冷
畫得其象，此得人之真容也。又以千金賜上官昭
帝，日夕沈迷，倦憊，短民王義極諫，翌日，命義擇
一靜室居之。二日，忽然而出，曰：能憶之居此乎？維
壽千歲，亦安用也。乃復入宮。

○
煬帝在迷樓，每一幸輒經月，宮女無數，多不得進。御
有候夫人者，珠色忽自溢于棟下，臂懸錦囊，
左右取以進，有詩云：

庭絕玉葦迹，芳華漸成葉，隱々聞蘭葭，
君恩何處負。

欲泣不成淚，悲來翻強歌，庭花方燦燦，
無計奈春何。

春陰正無際，獨步意如何，不及閑花草，翻
成雨露多。

粧成多自恨，夢好却成悲，不及楊花急，春
來隨處飛。

秘閣扁仙舟、離房瑣玉人、毛君真可戮、不
肯寫照看
此詞幽哲遠、恍然桑間之落也、比桂蕩矣、豈
得此斑斑、健行亦扇並哉、

○水晶瑪瑙

趙子昂有一私印、曰水晶宮道人、唐草忘以瑪
瑙寺行者對之、趙遂不用此印

○賈島劉伶

有好飲而醉卧於途者、其友扶之以歸、及醒語以
其事、因之對曰、賈島醉來非假倒、即對曰、
劉伶飲盡不留零、可謂切對

○勑敵

李長吉歌、天若有情天亦老、人以為奇絕無對、
曼卿對月如無恨、月常圓、人以為勑敵

○嚴氏汰侈

嚴公直父子溺器、皆用金銀鑄婦人而坐其中、
粉面綠衣以陰受溺 溺三

嚴氏藉沒時、榻下堆棄新白綾汗巾無數、蓋襟巾
也、每其婦人合、輒棄其一、一歲終數之為淫等
看 淫壽

○江南妓

江南一妓有殊色、且通文、滁州胡函書于許學士
席上見之、問其名、曰、齊雅秀、胡公賦曰、齊下

臭、妓誌曰、尚書可謂閨人、胡怒曰、此妓山野、妓誌曰、環滁皆山也、為之閑席

○鴛鴦樓

謝希孟每狎倡、陸象山責之、希孟敬謝、他日復為娼、建鴛鴦樓、陸又以為言、謝曰、非特建樓且有記、陸書其文、不覺曰、樓記云何、即曰首句云、自孫抗機雲之死、而天地英靈之氣不鐘于男子而鍾于婦人、陸默然

東坡在翰林日春宴、同官久、佛印亦然、謂坐客曰、某行一令、上以二字重說、下用一詩句招護、以狀其意、云、間似忙、蝴蝶雙、久過粉墻、忙似間、白鷺

飢時立小灘、王介甫云、來似去、潮翻西巨浪、眾西注、去似來、躍馬翻身射箭回、秦女游云、動似靜、萬頃碧潭澄寶鏡、靜似動、長楊影逐秋波送、又客云、雞似易、百尺竿頭呈巧技、易似雞、拔手路歧詔別間、佛印云、悲似樂、送葬之家喧鼓樂、樂似悲、送女之家日夕啼、又一客云、有似無、仙子乘風起太虛、無似有、掬水分明月在手、永叔云、負似高、稍子滿滿船金玉渡、高似負、石崇著得奕衣裙、吳客云、重似輕、萬斛雲帆一霎經、輕似重、柳絮紛紛鋪畫棟、東坡云、日、雞似易、不若云、少年一舉登科第、又曰、富似貧、不若云、惡、禱袍有故人

○嗜詩

張籍取杜甫詩一帙焚取仄聲副以膏蜜頓飲之曰令吾肝腸從此改易李洞慕賈浪仙詩鑄銅像事之常念賈島佛

○徐績

徐績父名石平生不用石罫不踐石遇石槁使人負之而趨

○米元章

米元章字元暉人親舊書有惑于空際窺其空至其再拜即放筆案整襟端拜西拜

○吃墨看茶

滕達道蘇浩然呂行甫沾唇墨汁蔡君謨晚

年多病不能飲我茶唯日烹把玩吃墨看茶事屬可笑

○好酒

劉某者好酒嘗与客渡江值厲風舟欲顛覆衆皆慌錯翁抱持酒壚默然不言既泊問其故答曰死生余耳若翻覆失酒此際何以遣懷

○劉伶

劉伶恒縱酒放達或脱衣裸形在屋中人見訛之伶曰我以天地為棟宇屋室為帷衣諸君何為入我帷中

○陳體方

吳中陳體方有詩名有收黃秀雲謾謂之曰

吾為嫁君、然君貧、乞詩百首為聘、雖方信之、
苦吟至六十餘章、神竭而沒、痴絕

○迂腐

江汎字士深、菜不食、心為其有生意、衣被多孔、以
綿置壁前、恐飢死復置衣中

○汰侈

劉寔詣石崇、如廁、見有絳紗帳、大床、茵褥甚
麗、西婢持錦香囊、寔遽返走、謂崇曰、向誤入
卿室內、崇曰、非也、是廁耳

○願蚤就木

有善說者、啟王侯南丞相曰、某所恨微軀、日益
安健、唯願早就木、得丞相一埋銘、庶幾名附、附雄

文不磨滅于後世

○愛東坡

陸宅之善諧謔、每詠人曰、吾甚愛東坡、時有問之者
曰、東坡有文、有賦、有字、有詩、君所受、何居、陸
曰、吾甚愛一味東坡肉、聞者大笑

○巧對

天上口、天下口、志在吞矣、人中王人、遠王、意圖全任

○秤雅謎

尺四寸以長、日月星辰擊焉、所求于人者重、而所以
自任者輕

○安祿山

安祿山好作詩、以櫻桃寄其子、作詩云、櫻桃一

籃子半青一半黃、一半此懷王、一半此周贄、群臣請曰、聖作誠高妙、但以一半此周贄之句、移在上于韻、更為穩叶、祿山好曰、我兒豈可使居周贄之下乎

○伊尹 雜誌

君不君、藏姓名、姓有人、名無人、

○宰予晝寢

宰予晝寢、注者以寢為寢寐、故至今以人晝眠為晝寢、誤矣、夫晝眠何大罪、而夫子責之、至以朽木糞土比哉、古經小傳曰、禮古者君子不晝夜居于內、晝居于內、問疾可也、宰予晝寢、蓋晝夜居于內而亂男女之節者、故夫子深貶之、然則寢當

為前堂、後寢之寢、非眠寢之寢矣、

○老泉為子瞻號

葉少蘊燕語云、蘇子瞻謫黃州、雖东坡居士、其所居之地也、晚又號老泉山人、以眉山先瑩有老翁泉故云、又梅聖俞有老翁泉詩、東坡自注云、家有老人泉、公作此詩、又嘗問有东坡居士、老泉山人八字共一印、而近亦有東坡畫像、一印、身并無一字、其援此則老泉又是子瞻號矣、然豈有子犯父號之理、而歐陽公作老蘇墓誌、但言人號老蘇、而不言其所號、亦可疑者、豈此號滿一老字而後人遂加其父耶

の三聖を画き、釋氏の三つて仰おほき志こころの半なて
て俯うつむし死しるの地ちに伏ふしを拜をす善よし徂この才た
を試こみんことしををるる徂こ一見ひとををるる草くさをを施をせ
てをるる

釋しやく也や立たて而を説を空くう、老子らう坐を而を聽を之を、孔子こう俯を
而を笑を之を

~~其人~~ 其人其人徂この才たのたり

客あり一日山東京傳の居を湯上ゆに家人かが子のこぶぶ
焼やををす酒しゆ飯はんををす、客きやく戯をれをてをるる
菘す子しのの瓜か實じつ談だんににままけけととをを
くくししをを刺をきき油あぶらつけつけををるる

京傳きやう也やととるる之をのの應おうてをるる

油あぶらつけつけくくししをを刺をししををるるよよけけれれをを

色いろのの黒くろいいるる味あじ噌そうををつけつけををるる

当あ急きゆう即すなは妙めう蹟せきをを解とくくををるる

服部ふく元もと好このみ加州かう藩はんのの医い士しととるる三さん奇き矯きやうととるる狂きやう歌か
をを善よくくももううつつてて祝い融ゆうのの笑わらををるる罹らりり家い完げん林りん火か盡じん
すす人ひとありあり戲あそむむのの門かどにに貼はりりてをるる

御ご醫い者しやく者しやくさんさん家いのの黒くろ焼や向むかひひををるる

明朝めい元もと好このみ之ををを見みてて一ひと笑わらむむををるる筆ふでをを執とりりて
信しん書しよととるる事ことををるるををるる

日備大工の腹ぐすり

板南海の詩詠詩の字眼を講ずる好例
を引徴りて曰く昔と蘇東彼の妹殊りの詩言
に通じたりしと或の坡天山谷相会し和風細柳
淡月梅花の腰へ入る一字鏤る愛る句の
工拙のこゝを存るとも人久しく吟哦し
先一字を唱て云く和風揺細柳淡月映梅花
妹の云く未だ自ら云ふと笑ふ山谷は唱て云く
和風舞細柳淡月隱梅花妹の云く少自云う
お人云く汝の句奈何妹の曰く和風扶細柳淡月
映梅花こゝを存るとも二人唱を拍て書

漢せしと云く善し事懐の甚淺し山谷
少し言味あり妹の句を至る人急の表に出
奇なること甚し是を以て字眼の味を知ん
と僅く一字全篇を死活す人の苦辛
字眼を存るも直

或る人村井木身格壽山はの大年の向つて周公且
待且と云ひ格壽を亦む格壽山はの大年ありて
左丘明喪明と好射山はの大年 (假名世迄)

假名世迄の句下谷ありて山祝女言寺の
後妹の縁ありて寺の家のついで

ありし云ひいひけりて祝言言有の活派の巻訪多
し此方の会談の思ひまゐるもの少しと云ひけん先
生微笑しとおうく真のいものまゝ蠅のうらまゐる
多しとの統ひしと

細井彦彦門人の語りて曰く脇差のふかひ七月の末
八月の初よりよく研ぶよしと門人眞意を解せ
ず其故を問ふ彦彦曰く栗柿の浮山ある
時分らんかと

半蔵の愛人價の事下を傍人不知らしめせる為の
教●字の隠語ありて聞くるもの解する能くす

例(心車夫社)をけんことを云ふの如し今
木燠卿の漫画池草を樹するも支那をも同扱
の隠語ありて即ちその事即ち詩を載
す則ち左の如し

明の田世成曰、抗州有四平市流、以一為三、意多
矯、二耳邊風、三散秋香、四思鄉馬、五誤
自期、六柳搖金、七御花甘至、八霸陵橋、九救
情郎、十為舍利子、十一曰清黎花、大曰朵
々雲、老為落梅風、諱依物為教、履也以其
是下物也、後又諱為撮金錢、則義意全
無、徒以惑亂親聽耳

説みけの癖ハ何くと云事多末の莊俾り
 鶏肋篇ハ小人之相主多有相驗者有一絶
 欲識為人賤
 先須看三四般
 飯厨厨床疾
 睡重着衣箱
 羞無不應と云いつくも人情ハ甚る事なり
 漫画
 池菴

俗話ハ上ハ犬名多下ハ賤きうら
 店任の者ま
 七毎日掃糞を吃ぬ者ありと云く
 田汝成加
 委巷叢談ハ杭州の人一日吃三十犬木頭
 以三十萬家為率大約每十家吃掃糞一分
 今ハ許之則三十犬矣
 是杭州ハ甚ハ
 漫画
 池菴

の地多ハさるる其間ハ味嚼を用ハ掃糞を用
 事多きと云ん此弊を以て計るハ
 江戶
 の家々々々掃糞を吃減す事凡一日ハ幾十
 犬と云んや計難
 漫画
 池菴

王外記憲王（一）ハ男色を好め一節あり
 左ノ之を抄録す

王好男色、自外諸候以下、至朝士大夫及吏卒家
 人子弟、苟有姿色者、皆入侍中、如初色子候利重、
 肥後子候有孝（細川和泉守守士領主）備前子
 候輝録（池田丹波守）南都子族直政（遠江守）
 莊内族忠貞（酒井左衛門）官津族昌幸（奥平

美作守(長岡茂忠辰(牧野駿河守)松本茂忠周
 (水野出羽守)膳所茂康余(本多下徳守)田中候資
 直(大田根津守)津和茂茲親(右州亀井氏)飛騨
 候頼時(金森氏)盤築候忠徳(七平伊賀守)土生
 候輝貞(松平右京大夫)懸河候直朝(井伊兵衛
 少輔)飯田候親常(堀美作守)刈谷候重高(福
 垣對馬守)生實候重令(赤河氏)柳生候俊亦
 (備守)皆以色其無色而侍中者如肥前子候元
 武(忠直子松平紀伊守)桑那候定重(松平越中
 守)篠山候信庸(松平紀伊守)数人而已、柳澤保
 明、里田直重(豊前守)皆少府郎以色幸、卒爵
 列候、保明封河越、後徒峽、直重封下館、他以

色受幸得爵位者不可勝計

伊達黄州政宗の意家意(一)して俊秀(一)し、今更云
 ふまでも(一)なり、(一)常て連歌師紹巴松島是(一)おの(一)為(一)の
 領下(一)ま(一)り(一)と(一)少(一)き(一)紹(一)巴(一)を(一)扱(一)き(一)け(一)る(一)折(一)し(一)七(一)時(一)多
 の(一)聲(一)り(一)ぬ(一)し(一)る(一)鳴(一)き(一)け(一)ん(一)の(一)政(一)宗(一)取(一)あ(一)く(一)す
 ち(一)け(一)聞(一)あ(一)る(一)方(一)の(一)領(一)分(一)の(一)味(一)を(一)き(一)す
 と(一)あ(一)り(一)け(一)ん(一)の(一)片(一)合(一)十(一)郎(一)信(一)に(一)あ(一)ら(一)る(一)を(一)但(一)と(一)居(一)る
 から(一)柳(一)脇(一)は(一)く(一)し(一)と(一)て
 る(一)ぬ(一)さ(一)ら(一)だ(一)ま(一)つ(一)て(一)通(一)れ(一)は(一)と(一)き(一)す
 と(一)い(一)ふ(一)紹(一)巴(一)心(一)を(一)さ(一)し(一)て(一)お(一)ひ(一)ら(一)る(一)

どうどうと瑞雪ふあはくはとくます
とつけりて政事の向ひまこと一四の主たる口氣
とん片倉●のハ社稷の臣のこころあふいんし主人
とる放埒もふ其修ふおくまふとの言氣みえを
紹巴ハ関係する言意をあらはしつゝさすくゝ連歌
に身を言あてたるまは徳氣あふらんて言んまると
の序藍川譚海抄のみ也

服部南郭学を物組織を治し組織せんとする人
首を出し其中の姓名と和歌の首句とを添へて
乙誦しを曰く大江千里月と南郭燕りよ成し
朗し吹しを曰く春道列樹山と望しぬ對

さし

○中井竹山谷風と力を角す

五五

角中井竹山谷で京師より高きまの山谷風来り訪
ふ竹山偶々平生と会後了酒南谷風を解して
曰く清小枕挽戯を考さんと谷風笑つて之ん
を許すこころは竹山谷風と枕を挽く竹山素
と大カ枕終る懐る更々他の枕を執りて試む
遂に地谷風の為め挽くも喉のいも竹山の手を
み枕を離しぬかまして竹山ハ素人中の大カさう

假名世送り曰く南郭先生ハ至飯好物なりと膝
向らん所く金吾姓ハ平野名ハ和仲来りて何をの言し

十為田心一全くこんどう出たさう東都の二大刺
教書の度辭あり一大無二天無三王無四龍無
五暗無六交無七切無八吟無九丸無十千無
こん七五文理あり桂林漫録

○由分田以

實出流と云傍濃州の志を旅行とし時馬士酒店の
暖簾の根底と書なるを見し書法を知りぬ人の
書なるさうと云けり故たまに字体難の無
何れ笑ふ如と見るん馬士答て云や丸由分の字
を書らん由分田以として致を由る作る脚の脚
を分る作り致を由る作る脚を分る作る
流るる此等其法を知ると見ると由の致

み人の脚を書るる笑の梅の壺碑界の作
しと然俗の流るる梅の壺碑界の作
り字は書の塔は由る由分作のり此の例
あり桂林漫録

○硯蓋鏡

跡史二蘇五の作のる硯蓋の鏡を載す
硯石櫛在 硯山已鏡 善女既去 子子未
或措大の書ん硯石櫛在を簀竹懐裂る作り
硯山已鏡と岩山前措二作る小児の謎談の也と
云ふ字を字相ハツカテ虎の頭を取る又幸疏
と云ふ字を深山路や深山カリレ清犬の一
勢とと云ふと然似たる勢向る一
全上

一籠の音くしと連中の一人某程参りの次あると長提
袋を持ち籠を振りまき入り来るると一方より
ぬ膝をさう是れ即ち黙阿弥を師と見まて
えんとう刺意店すみやへ行つんとこの趣心より
き黙阿弥のくもを推しけんか折節歳考る
昔心し一籠の姿相あししを付入に張あんか
み振あひまのう房あはさるる壽仙振く行きて
おめくまの酒言あめをまきしき此等のまや
ままると黙阿弥ハ一籠の酒をたに飲まぬ身
まうら程よく潤あをえてきり其ま牙を
野らしめとさや

〇

温方画随筆の曰く清の康熙 聖祖仁 座右の聯其詞
曰

日月燈、江海油、風雷鼓、杖、天地大一番戲場
堯舜賢、文武末、琴操舞、漸、古今未許多脚色
明の瘋晋叔、元曲撰、引戲の九色、曰且ハ吉場之奴
まう末ハ吉場の男子、まう形ハ奴僕傭夫醜陋の人
洋ハ倭番の人、打拵する者、脚色ハ狂言のし
くみ、戯路ハバウ、又別末ハ心まを佐る者
まう捷識ハ滑稽、心生ハ忠義、其か傑、
まう小生ハ風流才人、打拵、心且ハ貞節の女小
且ハ艶女妾婢、まう鬼目ハ色、脚色ハ
歌をうたう白ハ詞、色ハ脚色、脚色ハ

すといふに口上りいひて

板のうきを視音祭とて用るに二廿、うと云ふ
そのうち、唐紀の注に曰く玄宗の時、散序、棹、笛
一、拍板一、腰鼓三、を用後人の歌舞に板を以て
拍をとり木、の象牙を以て丸を八片、鞀を以て
母貝を、両手は冬其端の一片を執り、こんを拍り是
を拍板と云ふと云ふ

又漫人をサハワカと云ふ字に拾遺云古の歌舞を
やるといふと云ふ地類の伎の字を借る中舞
の就家^{キチカ}のよめるるをいひ明藏晋叔、元曲述の
雜劇の九色と云ふ名目あり是の今云々形は段
敵没るると云々題目を其内小且、猱と云

乙美女妻嬖と云ふ。夫且、鴉と云ふ美女嬖嬖と
云々云々且、猱也猱之雌者也、性好淫、狂
子注、病猱喜交猿為牝牡、故古語之伎謂之
猱、今訛為且、又且一名曰猱、亦猱属、喜食
虎肝腦、虎却食之而輒負、托背一、猱乃
取氣、遺、虎骨、虎即死、取其肝腦、食之
以喻少年愛色者亦如猱然、故妓女總稱曰猱
優人名曰打扮美女唱妓、亦曰猱、梅入猱、猱
同字と云ふ、昔と云ふと訓し来り、俳優をい
ふ、あ、い、や、ふ、と云ふ事、猱あり又曰鴉似
雁、大志、淫、無厭、諸鳥、求之、即就、故妓女老
者曰鴉、と今、好家の姫をやり、いと云ふ、鴉

くみりと一場の昔の事を意起せしことあり又南柯夢
續編を出版する。際も刀屋田村の三回りの死の
馬現る。田村をいふ。其後を合子言衣を裏かくる
のさまを画。うへを清しめんとせしむ。た言お雁をす
斯るは穢お誰んの之をいふ。七人若し死す
と云り。著者先づ之れをいふ。たよと馬現る人
り。想う。後。二人文を後つとをわ

○紀文と文魚の騷奪

紀文騷奪。暇家毒を破る。晚年海の一の鳥居の道
に住し。紀文の強後俳諧の宗匠。其家を罵
ひける。長閑の天井紙張る。あし。が。いたく。た。び
なん。経師。張替。さ。する。時。経師。言。ひ。ける。や。う。こ

の何人の住いし跡やんあ。も。い。物。ぬ。み。も。あ。け。り。な
ん。と。あ。け。ん。天。井。を。張。り。た。る。紙。を。見。く。ま。う。つ。紙。を
あ。く。ず。日。本。國。中。の。紙。を。う。と。い。ひ。ける。す。し。此。一。を
以。つ。て。其。盛。め。を。お。後。す。べ。し。こ。ん。と。一。對。の。話。ハ。天。の
の。比。大。八。大。二。の。一。也。聞。之。を。る。文。魚。也。差。大。の。屋。治。兵
衛。あ。く。百。十。八。人。の。通。人。直。ち。あ。く。し。め。文。魚。銀。の。と
り。の。ゆ。う。と。髪。を。結。ひ。て。出。し。し。を。通。る。也。見。し。後。り
あ。ふ。や。う。文。魚。が。銀。の。針。の。ぬ。ら。り。日。一。の。時。を。る
さ。の。み。移。す。へ。き。も。あ。く。ず。と。云。ぬ。し。を。聞。き。て。此。後
ハ。卒。り。も。銀。の。針。の。ぬ。ら。り。髪。を。結。ひ。せ。し。と。云。ぬ。也
魚。も。肥。え。の。ぬ。く。寒。を。う。る。し。目。御。殿。一。所。川。山。岸。の
松。子。作。り。間。口。二。間。む。う。う。の。家。に。住。い。ける。比。あ

北と上官惻然として之を憫むて曰く善いさりき
君家の凶禍重併此の如くあらんと是を曰
く實に此事耳但此對属の親切を問ふると
上を笑つて之を納ふと又王荆公諱の母人の姓
字を取り創用句を為して云馬子山騎山子馬
と善し馬於事字の山子山、山子馬ハ魏王八駿
馬の名、傍々人あり久しといひて錢衡水盜ニ
水衡錢と時々錢某爲水衡令とて因りて謝
して曰く唯此對を作ると欲するのみ毎々い
ふ非ざるうと共々絶倒すし夜航の記

○

昔々所入桶屋ありけり由傳ある人の馬ありけり

相應ふ文章ありけるの陋き甚なるやとて、唐を
構へいと貧しき体なる仕官とを勅とて人ありし
と此を也つて生涯桶屋を昔々として世を送りし
と此人嘗て物ある世の中の人の交を教訓して
木々に竹にありいふも底の如
いはせん桶やたかきととも
斯く詠けりといふ(覆るるたあ)

○

近き頃東本願寺下向ありける遠近の信者乗陣に
隨行し門路を見ざるを千載一遇と打たむけ往來も寒
かきふる群集せし中一人の志波門路を知らず
とて流るる人を押のけ門路の無かりたる處の

内一つと頭を入らざる門然うもくや思ひ入りん年七七
頭を押出し給ひしを^勘團の信為とも思ふこころま
く此為^安の頭くハ門然さまの御年を解んらんしを
南無阿弥陀佛ありがたしくと大勢言つて集^集
つて老はせの痛する坊主泣きおめくを耳ももめ
ず頭のもをまうく引抜き或いは取ししこ
きは中人絶つるばうり幸わつて其坊を痛め出し
七松友の毛ハ大方まわしり取らん思ひまう法体とま
けま田文政中ま書きまう或人の遺稿ま^或
(全上)

〇

近世百七の流十卷書まを稀ま^世傳かんり是ハ天保

嘉永の際市尹なりし大尊純登寺(初め安房守と稱し
たり)の随筆まを思ひ^其の中ハ北町奉行の使
典方東條ハ大夫の事を云つて一節あり同く東條ハ
夫ハ文才をけんじ^臨機应变の技あり公事海法
いのやうまうくましものまもハ大夫の味^味
思ひ分めるわう又強盛ま^何按する^核問
ちも白状し難きあるハ大夫の味をうらん^思
白状す且ハ大夫の味を死^就けん^本意ま
と賊とも申し由ま^或る^的参州の者公ま
ておハハ大夫批りる^幾度ま^一向^の理^非
を承伏ま^ハ大夫の^思ひ^是は^理を^従
あ^のく^思ひ^参州^の者^の思^味ま^の

と叱りし冬州者頭をあげし思ふ事申上りま
る冬州者法し思味のあるあらす既東照會
神君扱七神出生に去と云い流元の八大夫七言い法
めらんしと思らんし思ろ形を考しとて思
味ふぬこう東照神宮寺所御入國のみかりに終
者の皆御供の御連の被成及るあとの残りもあ
皆愚者心うろろ夫らん今冬州者思味
りと只んし此の余の斷聽ん長なりしといとお
うしかりき

河村瑞軒或る夜二百八十といふ夢を見たり覺て後
二百八十の數何にきりやと怪しく思ひ居ける折ら

天王寺を過りけり見通し夢判とぞ十番疑あ
り思ん事いと内ふ了物々河村瑞軒と申者
さう昨夜二る八十といふ夢見侍いも何の教をも
思慮も後す氣か、りも存する河神判し下さ
ぬよとろハト者瑞軒とす心中大いよ思ひ能
得物さうと思ひそこらももりけり河湍やの
此浦へ来り郷いしけり叔と葉木とて振く暫く
考へ謹んで御夢をいひる御方ハ誠人多福田
満の相とて此上の御神をみる夢余さう思ひ御
見し夢の如く取も直さす壽命りていさう叔と
御美母しき事いふと云くハ隨軒ま七悦の眉
をみさいいさな不肖の我等天龍をいひて人と

思ふ事のさへさへあり御推量の如く此上の視るる
壽考の外他年荒し算考たらははず人の壽考の
さへん事さ中ふあり料紙をかき取るとは何や
書けし是人の野生さす志猶さきおて御礼さ
るべしとて出行きさすト者い嬉しく寝笑みし
おとすき見ぬハ一物もさく只一首の狂歌あり
二面をバ禮と祝儀するもろせん

八十年ハこちへ張しん

其大器立の書を交ふりし
○葉竹帯賣の親仁

芭蕉の門人乙州の撰へる談畧雜記に葉竹帯賣の
親仁の書を載せり曰く雅波の葉竹帯賣の書

酒をぬみし瓢を腰につけて長日帯を巻く事
きけるの懐ろより土の人形を取出し太郎兵
衛親兵衛と名を呼ぶ酒の相手よりを樂あは
或人面白き曲者と覺て酒をまたんとて呼入ん
んが帯賣あやめ笑ひて我れ帯を相手よりんたの
し心當てる北方の親兵衛太郎兵衛我れ
し随ひまきり我れを随ひのり我れを随ひ帰
るさうと唯一りいれ行しとありて定先翁の心
バセ彼は今宮の末山か路さとおやま人形を求
て生涯をさへん折ことも高根の花や見たと
ありと口辨りしと同日の論るるん

○歌川國芳の浴衣画

嘉永六年兩回柳橋の河内をくゞ狂歌師梅のや翁
子狂歌畫會の催しあり其席をくゞ一勇と名四某
思ふと十過と録もくゞ水滸傳百八人の内九紋龍
史進を画けり當日四某大勢の門弟を取持ち
かたぐ連れ来りおのれを始め一回真宮木綿白
地と大紋りの浴衣の揃ひをえ板画のこゝり人物を
認めおわると九つ龍を畫き雲のところが手拭
のお端に草と薄墨を塗りこんだ隠し
まんじり浴衣を脱ぎて座敷のまじり墨玉の中
へんじりく墨玉を合ませ史進の足踏の
けたる岩石を畫きけり草の勁健うしん
おのつら丸くす一疋ドツト感嘆し流るん

當の江戸の名画を畫すと評判せしより府上の真
とくし席画をくゞ好工夫といふくゞ餘りやと
軒堂のくゞるんじ畫をくゞあゝくゞ氣をくゞあゝを
きくよのくゞ (又たあゝくゞ)

○
新井白石高玄仙鶴樓をくゞ共く物後をんける時
青葉の紅葉を對しふき後をくゞやとけんけんけん
とくゞあくす細根の大根とをくゞけんバヤ、くゞ駒引
錢にはとありしり鶴樓かにはくゞくゞ虫豸米んい
かいとて大笑す又ある時花をの五百羅漢渡川
則是一千影といふ句をよんけんけん伯憐 丈六弥
勤越山、後見八尺光といふをもて應じきとぞ

當時の風流おもしろい

○宇野醴泉の任誕

江村北海雲城に行くの途中守山を徑て大雨を思ひ宇野醴泉を訪ふ未だ寒暖の挨拶終つて主人何れへ去る之れを家人が問ふも家人知らず少くありて窓外より先生のこと連呼す北海おるて之れを顧みぬ主人世表筆を揮ひ魚網を干し雨を冒して交る奉體淋漓なる主人笑つて曰く幸ありて君の枉顧を辱す唯村長鮮魚をゆふは田舎の故郷の河魚を繼するのみと

○徂徠の簡傲

肥州の水足平之允といふあり即徂来文集より

所謂西肥の水也秀才是年十六歳にして徂徠先生(書簡を寄ると経義を問ふ試み奇童なる時肥州に帰る人あり徂徠翁于鱗の葦山記を告して曰く汝を推して帰て秀才を示し訓五句讀を付させよもしまこと事なき其責を以て秀才の才をそきて秀才の才を以て其人帰りて秀才を示し且傳へる徂徠翁の言を以て秀才の才を見て即する訓五句讀をくたへし望まざらん其の才に凡そあきし生を獨りし契約の如く片耳のくたへし先生書をうつて讀みへ曰く其の神童の才を後をうつてゆふんハ片耳を七あきくたへし其の才を

ある事と其法を因るん人麈衆の席末に徹せ
ず能いす其法を列る仕方のあるん唯平心
害氣に二ふ毎に句を切り間を置きて讀下し懐せず
處せず末より倍々聲高を張るのみ譬へん武一家
一語一法一度一一文一武一忠一孝を一勵む
可き事一と云れ初の子音の送るに席末
まむ到り届る間持重して踏の字を口より若七
す末の年節月日を將軍の名字に至るまむ斯の
如く讀下し更に少間を置きて御朱印と三字連
讀大聲呼すんハ満足凜然として手は汗し
覺つす首を仰ぐして昂る能くせん是の
其法とすと佐藤一高の訓讀せん一由

○菓子の名の雅俗

善爲随筆に曰く菓子名づくる牛の皮を似なんかとい
牛皮といひ犬の皮を似なんかといひ羊の肝を
似なんかといひ羊肝といふ、古人の純素横平思ひやぶ
し、後人の物忌ひする心より文字の不潔なるを嫌ひ牛
皮を末肥(石川大山翁の北山紀聞卷一詩教云云)草
刺末といふ牛皮餛の菓を手のうらぶたしと華人を
ハ幾くの詩賦かあらんか桑城の末に詩をきかす
何さま葉して見よとて一笑しぬ私の云牛皮の
字をそと忌みし迫末末肥とかくほむハ詩ハごさあ
るまじとてハ翁嚇くやうとある)ハ犬皮を研
皮(葉のすさみ巻上る云く松風といふ葉つよを止山

の僧侶ハ犬皮と唱ふ牛皮ハ向心なる名ヲ云フ一犬の字
を忌みて今ハ研皮の作ル或ク又云ク見肥の字ハかく
ハよけんといふ因ル犬皮を松風と名づくるわけハ楊柳
漫書ト第四ニ云ク干菓子の松風ハ初め京都より製
し出し或御方、御銘を乞ひ奉りしニ御造ありて
松風ト號ハ後ハ其ハ表ハ火の剛直けし詰固
泡立しあと、けしをふるまをいろくの斐あやあれど
うらハ純のリトト摸模板たまぐらハ麻敷義まま
ト松風トハ名ハけ給へりト羊肝を羊美ト音を
濁して文字を易ハ其書ト失ふる事

○
安積良二五聖經ニ泥虫の弊を説目て曰く孔子家語曰東

狭の人中四の禮儀と慕ハ中四トハ元ハ能ク事ハるを
儀トすトゆキ、妻を取リ美トすし故元ハ儀トすハ
兄を敬すト似たんとモ禮の二ハ非トす中四の女ハ死
して嫁セリトゆキ、其世の失ハし時再ハ嫁セリト
婿を取リて婿セリト云ハとも婿を取リて貞
女の道ハ非トす且ハ聖人を慕ハる大ハの間也ト云
随園隨筆ニ載ス方望溪客を招キ、酒食を樂
すト絶て勸めず人其故を問ハ禮ハ主人客を喜
す客食せんトすハ主人客を喜ハし粗糲の食
を以テ辭す客ハ必ハんを食ハル至美ト云ト稱す
る古禮ト云然ト云主人定ム勸め客及ハし食セリハ
禮ト云んヤト卷ハ入り是ハ禮記の雜記ニ孔子食

于少施氏而能容將祭、主人辭曰不潔祭也、
將祭主人辭曰不潔祭也、禮記曰是也本つきし
と見一なり然し甚泥たる事あり宋の陸処人の
來を吊し膝行して入る人其の故を問ふは泥る云
いすや凡民有來匍匐救之と云へり聖人の書を
讀て七節拘泥すぬ其弊こゝに至ると書
噴飯す不潔なり 而蘇芳洲の橋忘茶流る噴飯
一個の忤逆の子あり十書を讀もし子事ニ父母一驚鳴
一三年に至り思謂へくく道應、此の如くするべしと
次きの日、到り棋曉起き来り、鹽柳完就り父母
の寢處に到り叫し醒す父母曰く天徳、うゝぬく
くサしく睡りて起き来り心塵、うゝぬく何んを文

おし我のを使さん子曰く是さうすく我のを
教ふる事道を守んと欲すと書噴飯す不潔
○又人あり疑つて曰く驚呼するも父母の安を問ふは
父母未寤睡の中入存り曰高しを問ふは則ち禮
注、違ふ之んを大ま何せん又一の使を奉しん
来り者あり打書所、到り馬を下り午を拱し
守者ある問くを曰く貴州何の林を大らうとあ
すと問くは錯愕す此等、後此礼記を
記を讀んて礼意を知らさう也其の噴飯
すもさや

明治三十七年

十一

